

宮上道遺跡

2006年3月

鈴鹿市考古博物館

例 言

1. 本書は、鈴鹿市小田町 581-1・595・596・600・601・604・605・611～615・936 で平成 16 年度に鈴鹿市が実施した、市道新設に伴う宮上道遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査にかかる費用は鈴鹿市（道路整備課）の負担による。
3. 調査体制は、下記により実施した。
調査主体 鈴鹿市 市長 川岸光男
調査担当 鈴鹿市考古博物館
(組織及び構成) 鈴鹿市考古博物館館長 平井茂公
埋蔵文化財グループリーダー 中森成行
埋蔵文化財グループ主幹 宮崎正光・北条正則
副主査 田中忠明・水橋公恵
事務吏員 伊藤 淳
嘱託職員 吉田真由美・林 和範
臨時職員 杉本恭子・坂下日向・徳永由起子
永戸久美子・別府智子
4. 現地調査は、上記係員のうち、北條・水橋が担当し、田中が協力した。
5. 現地での調査は平成 16 年 4 月 5 日から平成 16 年 6 月 22 日に実施した。
6. 本書の執筆は水橋（現 斎宮歴史博物館技師）が担当し、遺物写真撮影と編集は藤原秀樹（平成 17 年度埋蔵文化財グループリーダー）が行なった。遺物の整理・実測・採拓については杉本・坂下・徳永・永戸・別府の協力を得た。
7. 座標は、日本測地系第 1 系を用いている。図中の方位は座標北を示す。
8. 遺構番号は遺構の性格を示す記号の後ろに発見順に番号を与えた。
SD：溝 SE：井戸 SI：竪穴住居 SK：土坑 Pit：小穴
9. 本調査にかかる遺物・図面・写真はすべて鈴鹿市考古博物館が保管している。
10. 調査及び報告書刊行にあたっては地元関係各位をはじめ、下記の方々にご指導、ご協力を得た。記して感謝申し上げます。
尾野善裕・亀山隆・木野本和之・小濱学・竹内英昭・新田剛・山際文則・上村安生

目 次

例言・目次

1. 宮上道遺跡の位置と歴史的環境	1
2. 調査にいたる経緯と調査の経過	2
3. 土層	5
4. 遺構と遺物	5
5. まとめ	8
報告書抄録	25

1. 位置と歴史的環境

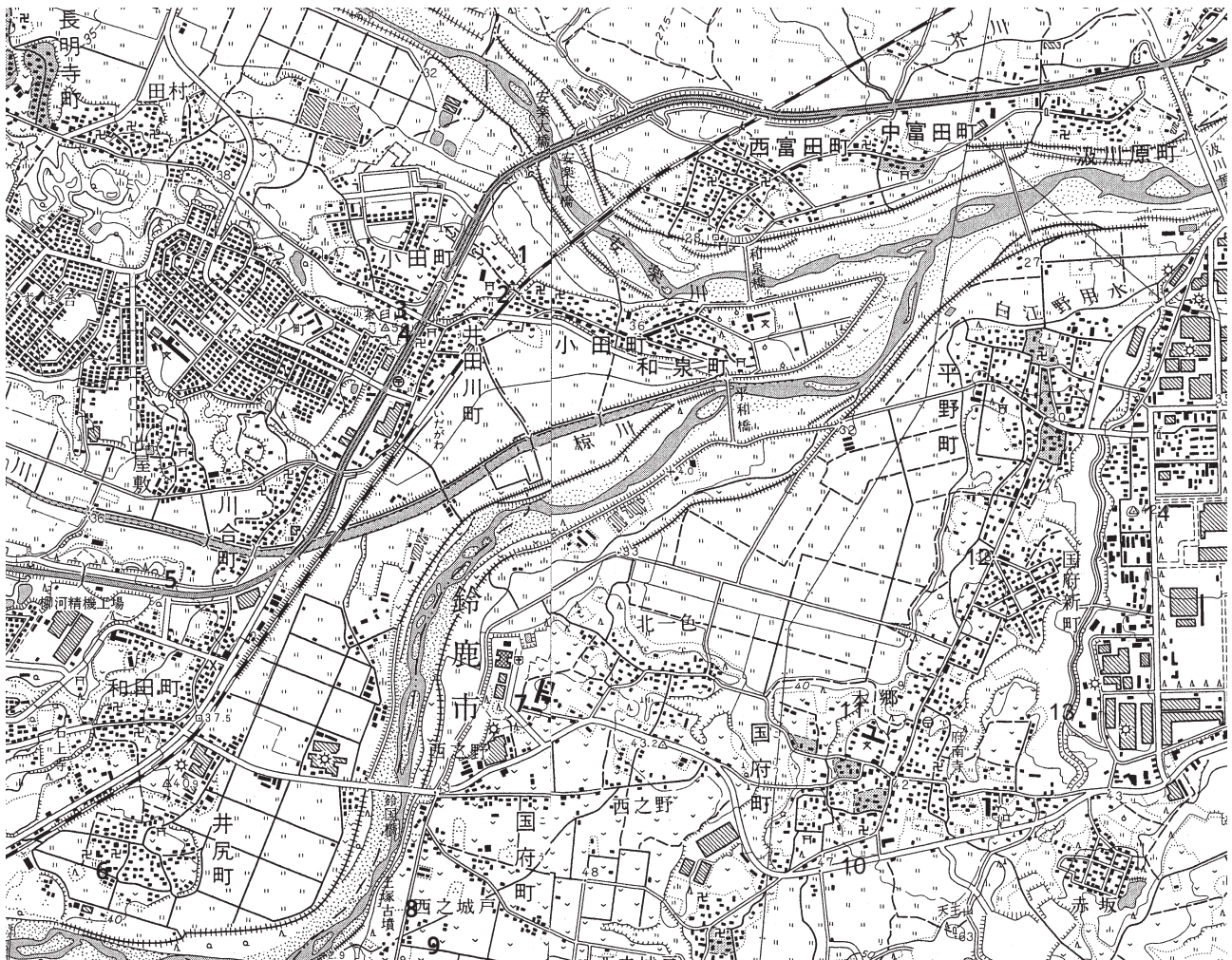
宮上道遺跡は、安楽川と鈴鹿川に挟まれた河岸段丘上に立地する遺跡で、古墳～鎌倉時代の遺物散布地として知られている。遺跡の南端には、特徴的な形態の須恵器の長頸壺が出土した宮上道古墳（横穴式石室を内部主体とする円墳）がある。

同じ段丘上には数多くの遺跡があり、中でもかつて約600m南西に存在していた茶臼山1号墳（亀山市井田川町）は非常に有名である。茶臼山1号墳は、直径20m、高さ4m以上の墳丘規模を有する墳形不明の古墳で、主体部である横穴式石室には箱式石棺が2個安置されていた。石室の中からは、100点あまりの須恵器・土師器・武具（鉄製の矛・剣・刀）・馬具（轡・鐙・銅鈴）が、石棺

の中からは画文帯神獸鏡、金銅製の冠や靴、純金の耳飾、ガラス製の玉などが出土した。

安楽川を挟んで1.2km北には伊勢国府跡として国史跡に指定されている長者屋敷遺跡がある。

鈴鹿川の対岸の国府地区は、その地名から移転後の国府があったと考えられており、三宅神社遺跡・天王山西遺跡・梅田遺跡など、古代の遺跡が数多く存在する地域である。また、古代だけでなく、縄文時代の集落である北一色遺跡や、保子里古墳群・西ノ野古墳群、「関の五家」の一つ国府氏の本拠地とされる国府城跡など各時代の遺跡も集中している。



- 1. 宮上道遺跡
- 2. 宮上道古墳
- 3. 羽舞場遺跡
- 4. 井田川茶臼山古墳
- 5. 上椎ノ木古墳
- 6. 井尻古墳
- 7. 保子里古墳群・保子里遺跡
- 8. 西ノ野1号(王塚)古墳
- 9. 西ノ野5号墳
- 10. 三宅神社遺跡
- 11. 国府城跡
- 12. 八百姫古墳群
- 13. 梅田古墳
- 14. 石丸野古墳

Fig.1 宮上道遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

2. 調査にいたる経緯と調査経過

名古屋から亀山を経て大阪難波を結ぶJR関西本線は、鈴鹿市内では鈴鹿川に沿う形で沖積地に敷設されているが、鈴鹿市西部の安楽川と鈴鹿川の合流地点付近では細長い丘陵を分断している。この分断された丘陵間で関西本線を跨ぐための橋梁は、軽車両までしか通行できない幅の狭いものであったため、以前から周辺住民による新たな橋梁・道路建設の要望が挙がっていた。平成15年度、市土木部道路整備課より道路新設のための発掘調査依頼があり、考古博物館では、遺跡範囲内を中心に分布調査・試掘調査（約4m四方のグリッドを10箇所）を行った。その結果、古代から中世の遺構・遺物を確認したため、平成16年度に本調査を行うこととなった。調査は、線路以西の丘陵北端に沿った幅5～8mの道路部分と、これに現

道の橋梁西付近からT字形に取り付く幅約4mの道路部分を対象に行った。

平成16年度夏の工事着工予定にあわせ、表土除去は平成15年度内に重機で行い、平成16年4月5日から人力による調査を開始した。橋梁西付近から調査を開始したところ、調査区南境で検出した溝が、事業地内の調査区非設定区域に及ぶことが判明したため、若干の拡張を行なった。遺構掘削を終えた後、6月4日にラジコンヘリによる写真撮影および写真測量を行い、6月19日の現地説明会（参加者30名）の後、竪穴住居の竈や井戸などの断ち割りを実施し、6月28日には埋め戻しを完了し調査の全工程を終えた。

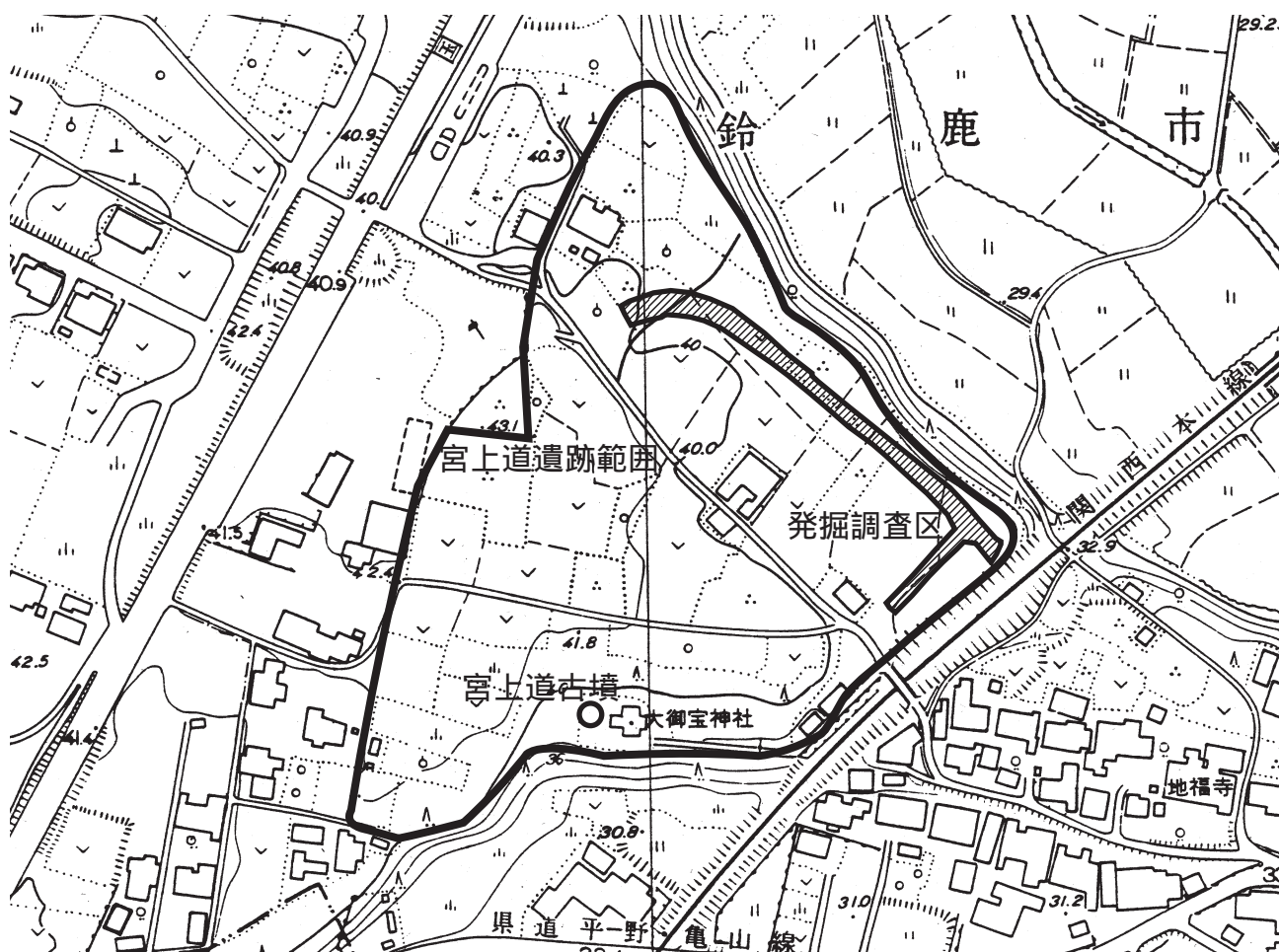


Fig.2 調査区配置図 (1/2,500)

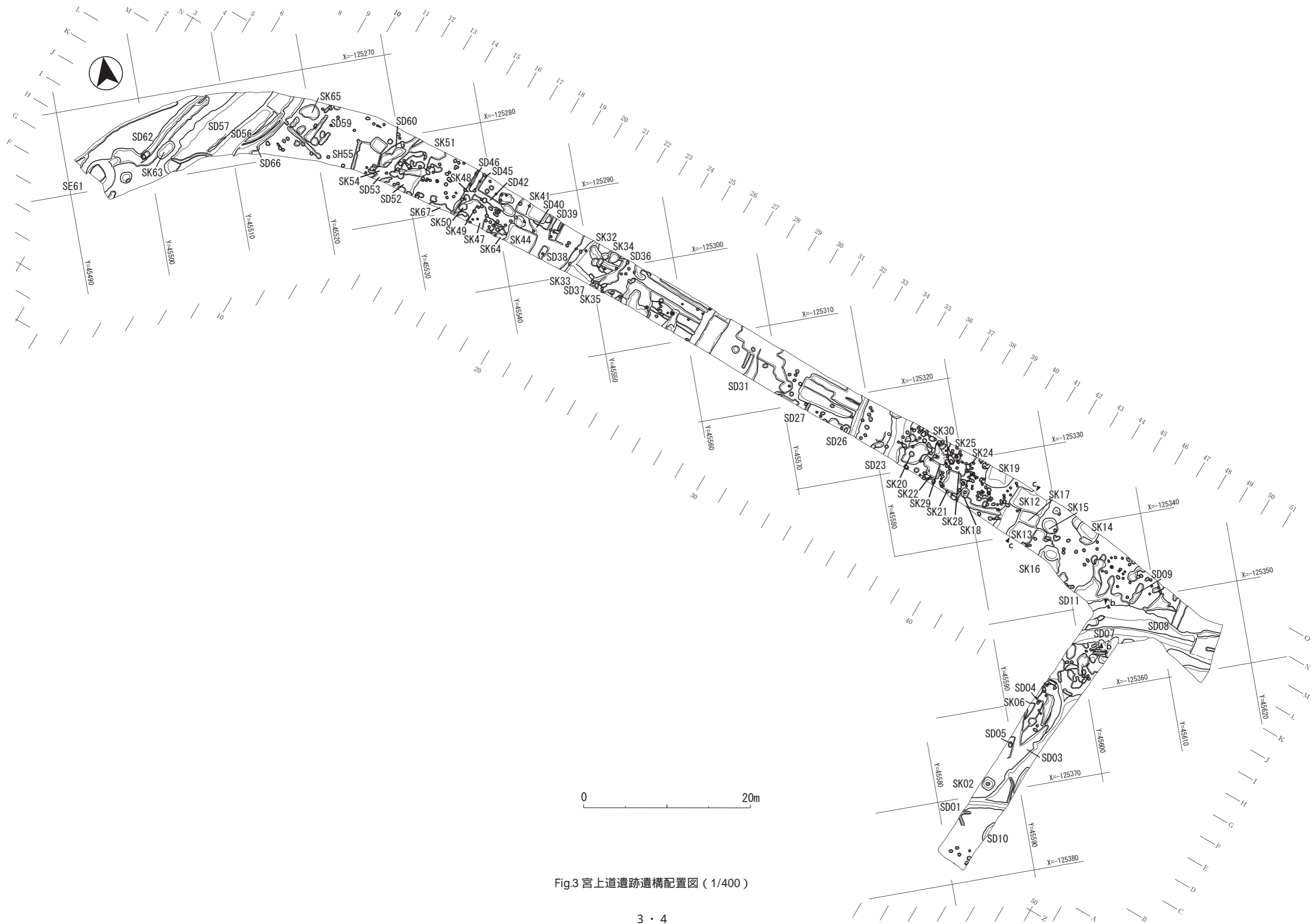


Fig.3 宮上道遺跡遺構配置図 (1/400)

3. 土層

現況地表面は西から南東へ向かって緩やかに低くなっており、調査区西端で標高約 40.1 m、南東端で標高約 38.5 m である。調査地点における土層は、耕作土直下で地山となり、良好な遺物包含層は存在しない。検出面となる地山は場所によって異なり、概ね黄褐色系の粘質土であるが、丘陵の中心に近い(S D 01・S E 61 付近)ほど褐色系になり、丘陵端に近い南東部(S K 14 と S D 07 に挟まれた範囲)では礫層になる。耕作土の厚さは概ね 0.2 m 程度であるが、調査区西端付近で急激に厚くなり、1.0 m に達する。

4. 遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代の土坑、古代の竪穴住居、中世の井戸・土坑・溝などが検出され、土師器・須恵器・山茶碗などがコンテナケースに 36 箱分出土した。以下、主な遺構・遺物について記述する。その他については一覧表を参照されたい。

古墳時代

土坑 S K 63 長辺 2.5 m × 短辺 0.5 m、検出面からの深さ 0.3 m で、平面の形態は長方形を呈する。S D 62 と平行する溝に切られている。土師器の小型鉢が 1 個出土した。

古代

竪穴住居 S H 55 長辺 4.0 m 以上 × 短辺 3.0 m の平面長方形を呈する。南西壁の南隅寄りに竈が取り付けられており、竈の外側で検出された長楕円形の土坑(S K 54)は、位置から煙道との関係が推測される。

竈は、基部の幅 1.25 m × 奥行き 1.2 m 以上で、高さ約 20cm 程が残存していた。両袖の先端近くで、竈の焚き口に凸面を向けた状態の平瓦が検出された。竈の袖は地山類似土で構築されているが、平瓦の周辺には焼土が多く混じっており、平瓦の凹面側にも焼土が確実に含まれていることから、平瓦は補修の際に使用されたものと考えられる。竈内部の埋土は焼土混じりの褐色または暗褐色粘質土である。竈の中央からは支脚石が傾いた状態で出土した。支脚石は著しく被熱していたが、床面に被熱痕跡は認められなかった。支脚石の上端には土師器杯(3)が被せられており、その周り

から、土師器の甑・甕などが出土した。

竈の前面から、凹面を上にした平瓦片が 2 枚重ねられた状態で検出されたが、床面からは遊離した状態の出土であり、竪穴住居との関係は明確でない。

出土遺物は土師器の杯・皿・甑・甕・鍋、須恵器の甕、平瓦がコンテナケースに 4 箱程出土した。

中世

溝 S D 01 T 字に取り付く細い道路部分の調査区で確認された N 75° W の溝。検出面での約 1.2m、底面幅 0.4m、深さ 0.4m の断面逆台形を呈する。埋土は黒褐色土で砂利を多く含む。山茶碗(碗)、常滑陶器(鉢・甕)、土師器(皿・鍋)などが出土した。

溝 S D 07 調査区南東部で検出され、調査区外へ続く溝。丘陵平坦面の高所から縁辺へ向かう緩やかな傾斜面に位置し、平行する S D 08 とは若干位置がずれて重複する。その関係から S D 08 より新しいことが判っている。幅 1.6 m、長さ 16.5 m 以上、検出面からの深さは 1.0 m である。

埋土は、灰褐色砂質土と褐色砂質土の互層である。須恵器(甕)・土師器(甕・鍋・羽釜・皿)・灰釉陶器(椀・皿)・山茶碗(碗・皿)・常滑陶器(鉢・甕)・瀬戸美濃陶器(小皿)・瓦・不明土製品・砥石・五輪塔(火輪)が出土した。大半は、磨耗した小片であるため、上方から流れ込んだものであろう。

この溝の周囲北東側には、水流で抉られた痕跡ではないかと考えられる不定形の溝や凹みが多数検出されており、これらの溝や凹みは雨水が S D 07・08 へ流れ込む自然流路の残欠と考えられる(S D 09・S D 11・S K 16)。

溝 S D 08 S D 07 と重複し、これより古い溝。幅 2.5 m、長さ 16.0 m 以上、検出面からの深さは 0.6 m。埋土は、大きく 2 つに区分でき、下層が地山(黄褐色粘質土)とやや紫がかかった暗褐色粘質土の互層、上層は茶褐色粘質土である。

土師器(甕・鍋・羽釜・皿)・須恵器(甕)・灰釉陶器片・山茶碗(碗・小皿)・常滑陶器(鉢・甕)・瀬戸美濃陶器(皿)などが出土した。大半は、磨耗した小片であるため、上方から流れ込んだものであろう。

土坑 S K 12・13・17 調査区の南半で確認され

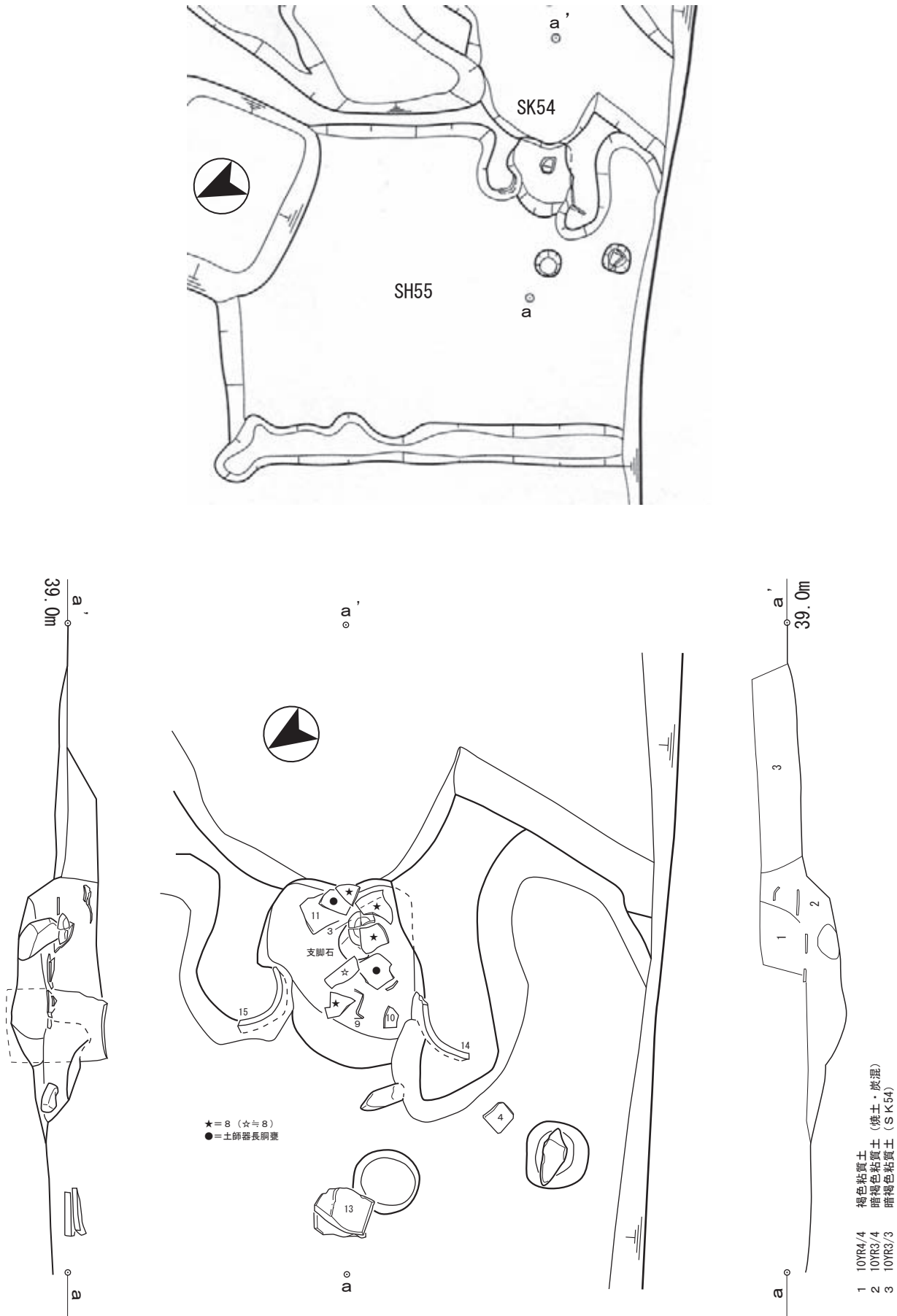


Fig.4 SH55 平面図 (1/50), 竈内遺物出土状況・土層図 (1/20)

た重複する3基の土坑。SK 13 SK 17 SK 12という新旧関係が判っている。埋土は、いずれも暗褐色粘質土である。

SK 13は傾斜の緩い凹み状で、4.8 m × 3.4 m以上 × 深さ約0.2 mの規模である。ほぼ完形の山茶碗・鉢とともに、土師器（鍋）、山茶碗（小皿・碗）、常滑陶器（甕）、瓦などが少量出土した。

SK 17は2.5 m × 1.6 m以上 × 深さ0.5 mの方形を呈する土坑である。土師器（皿・鍋）、山茶碗（碗・鉢）、常滑陶器（甕）、白磁片などが少量出土した。

SK 12は調査区外へ広がるが、床面は調査区内に収まるため、4.3 m × 約2.8 mの平面略長方形を呈すると推定できる。深さは0.7 mで床面は平坦である。3基の土坑の中では、遺物量が多く、種類も豊富である。土師器（皿・鍋）、山茶碗（碗・皿）のほか、瀬戸美濃陶器（四耳壺）や常滑陶器（壺）などが出土した。

井戸SE 61 調査区の西端で確認された井戸。検出面では東側に張り出しのある直径3.5 mの略円形を呈する。検出面からの深さは約1.9 mであるが、途中検出面から1.2 m下でやや平らになる。湧水は、この高さ付近が顕著で、周囲の壁もオーバーハングしている。埋土は、上層から 黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混成土、黒褐色土、粘性の強い黒褐色土、暗青灰色粘質土である。遺物としては、須恵器（瓶・甕）・土師器・灰釉陶器（椀・平瓶・壺）・山茶碗（碗・鉢）・常滑陶器（鉢・甕）・青磁（碗）のほか木製品も出土した。

その他の時代

上記以外の遺構としては、中世以降の遺構も多数検出された。また、遺構は確認されていないが、縄文土器が数点出土し、試掘調査に先立って行われた分布調査の際にも石鏃が表採されている。

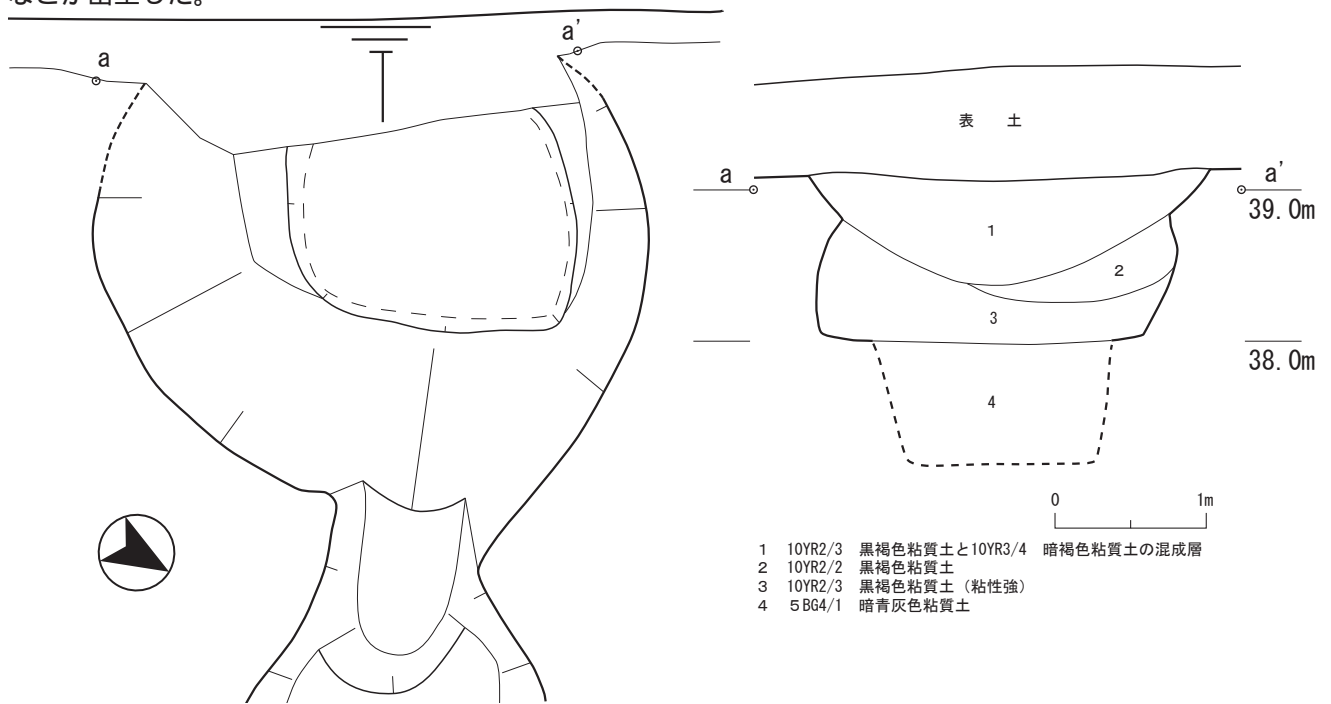


Fig.5 SE 61 平面図・土層図 (1/50)

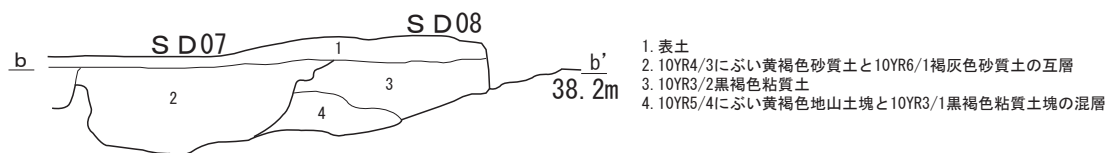


Fig.6 SD 7・8 土層図 (1/50)

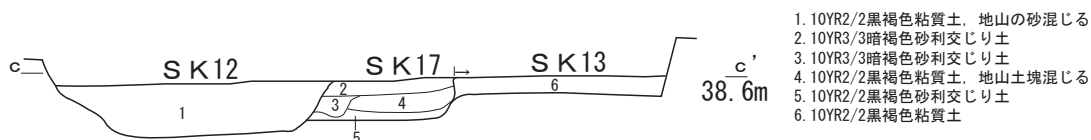


Fig.7 SK 12・13・17 土層図 (1/50)

5. まとめ

宮上道遺跡は、古墳時代～鎌倉時代の遺物の散布地として登録されている周知の埋蔵文化財包蔵地である。遺跡内の宮上道古墳から須恵器蓋杯・長頸壺などの出土が知られてはいるものの、本格的な発掘調査は今回がはじめてである。

調査の結果、主に古代と中世の遺構・遺物を確認した。

竈穴住居 S H 55 には、竈が比較的良好に残存していた。支脚石に土師器椀が被せられた状態での出土は、竈の廃棄儀礼として注目される。竈の袖に使用されていた平瓦は、凸面に縄叩き痕が明瞭に認められるもので、伊勢国府跡(長者屋敷遺跡)から出土する瓦と同類である。伊勢国府跡第 19 次調査(鈴鹿市考古博物館 2005)でも、国衙の政庁などで使われているものと同類の丸瓦が竈に使用された竈穴住居が確認されており、国府関連施設と考えられている。宮上道遺跡は、伊勢国府跡(長者屋敷遺跡)と後に国府が移転したと考えられている国府地区とのちょうど中間地点にあたるため、今回検出した竈穴住居は伊勢国府跡移転に関連する遺構とも考えられる。しかし、単に瓦を再利用しただけかもしれない、その性格を考えるには、なお調査事例の蓄積が必要であろう。

S H 55 の出土遺物は、土師器が大半を占めており、瓦と須恵器を少量含む。土師器は、地元産と思われるため、単純に南勢地域の編年観を適用することにはいささか問題も残るが、Fig. 8 2 ~ 4 の杯は、斎宮跡の土器編年(斎宮歴史博物館 2001)で第 1 期第 1 段階(飛鳥時代)～第 1 期第 1 段階(平安時代初期)に位置付けられている「杯 G」(いわゆる「粗製椀」「いなか風椀」)との類似性が高い。また、8 のような土師器鍋は、斎宮跡では平安時代初期～前期の遺構から出土することが多い。奈良時代半ば以降の造営とされている伊勢国府跡(長者屋敷遺跡)の瓦と同類の瓦が出土していることを併せると、S H 55 の年代は概ね奈良時代末～平安時代前期の幅の中におさまると考えられ、これは他の遺物の年代観とも矛盾しない。

中世の遺構・遺物は調査区全体から確認されたが、立地からみると、遺跡の中心は今回の調査区

よりも高い西側の平坦地に展開していたと考えられ、丘陵端に近く、幅の狭い今回の調査区では、遺跡の全体像を把握することは難しい。性格不明な遺構が大半を占めており、細片が多い出土遺物は、より古い時期の遺構・包含層に含まれていたものが、二次的に紛れ込んだものとも考えられ、遺構の本来の時期を示しているのかも不明確である。そこで、ここでは遺物全体の時期的な推移を見ることにより、遺跡全体の大まかな変遷を考えてみたい。

中世の遺物としては、土師器・山茶碗・瀬戸美濃陶器・常滑陶器・青磁・白磁・木製品が出土しているが、量的には土師器・山茶碗が圧倒的に多い。まず、年代を絞り込みやすい山茶碗の底部について概観してみると、東濃系山茶碗 1 点以外はすべて尾張系山茶碗であり、瀬戸窯の山茶碗編年(藤澤 1982)の第 3 ~ 10 型式に相当する時期のものが認められる。ただし、第 3 型式は非常に少なく、第 4 型式で若干増加する。安定した量の出土があるのは、第 5 ~ 8 型式で、第 9・10 型式になると激減する。

これまでに中北勢地域で調査された遺跡をみると、多くの集落遺跡で第 5・6 型式をピークとして、以後の山茶碗の出土量は激減し、古瀬戸後期後半(藤澤 1991)まであたかも空白期のようにみえる事例が目につく。宮上道遺跡のように、第 5 ~ 8 型式の山茶碗が安定して出土した遺跡はそれほど多くない。現在、山茶碗の第 7 型式は 13 世紀中葉、第 8 型式は 13 世紀後葉～14 世紀はじめ頃のものと考えられており(藤澤 1997)、これは関実忠が関から山下、さらに若山(亀山)へ本拠を移したという弘長二(1262)年や文永元(1264)年を含む年代観である。この点については、証拠となるべき記録はないとして疑問視する向きもあり(亀山市教育委員会 1990)、その所領が、現在の鈴鹿市域に及んでいたという確たる証拠は見出されないが、関盛政が所領を五家(神戸・国府・関・鹿伏兎・峯)に分割した正平二十二年(1367)に、当地が関氏の支配下にあったことは、ほぼ間違いないと思われる、関氏との関わりは大いに気になるところである。今回の調査でも、15 世紀とされる古瀬戸後・期の瀬戸美濃陶器が少量出土して

おり、これは当地が関氏の支配下にあったと考えられる時期の遺物とみてよいだろう。ただ、山茶碗の第9・10型式に与えられている年代観、つまり14世紀の遺物が極めて少ないことをどのように理解するのか、遺物の年代観の再検討を含めて、今後に残された課題である。

さて、遺跡の大きな変遷については以上のように考えられたが、山茶碗と共に出土量の多い土師器について見てみると、陶磁器とはずいぶん異なった在り方を示すことが注意をひく。出土した土師器には、皿・羽釜なども認められるが、量的には少なく、多くを鍋が占めている。土師器鍋は、すべていわゆる「伊勢型鍋」で、南伊勢系土師器鍋編年（伊藤1990）の（仮）A段階に比定できるものが少量、第1段階・第3段階に比定できそうなものがそれぞれ一定量ある。しかし、瀬戸窯山茶碗編年の第7・8型式に併行するとされている第2段階のa・b型式に比定できるものは全く認められない。つまり、山茶碗が安定した量存在するにもかかわらず、前後の時期に存在する「伊勢型鍋」がこの時期だけ欠落しているように見えてしまうのである。

この点に関連して注目されるのは、尾張地域での「伊勢型鍋」の出土実態である。尾張地域での「伊勢型鍋」の出土事例を集成・検討した北村和宏氏によると、尾張では南伊勢系土師器鍋編年第2段階a型式以降に比定される「伊勢型鍋」の出土はほとんど認められず、南伊勢地域とは異なった独自の型式変化を迎えるという（北村1996）。この指

摘を踏まえて、宮上道遺跡出土の「伊勢型鍋」を見直してみると、尾張で第7・8・9型式の山茶碗に共伴して出土したとされる「伊勢型鍋」（北村分類鍋A5類・A6類）と極めて類似性の高いものが少なからず含まれていることが判る（Fig.11）。宮上道遺跡出土の「伊勢型鍋」は、これまで単系列的に理解されてきた伊勢国内の「伊勢型鍋」に対しても、多系列的な視点の必要性を示唆する事例といえよう。

【参考文献】

- 伊藤裕偉 1990 「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1 三重歴史文化研究会
亀山市教育委員会 1990 『沢遺跡』
北村和宏 1996 「尾張の「伊勢型鍋」第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
斎宮歴史博物館 2001 『斎宮跡発掘調査報告 内院地区の調査本文編』
鈴鹿市考古博物館 2005 『伊勢国府跡7』
中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
藤沢良祐 1982 「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』瀬戸市歴史民俗資料館
藤沢良祐 1991 「瀬戸古窯址群 古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』瀬戸市歴史民俗資料館
藤沢良祐 1997 「中世瀬戸窯の動態」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

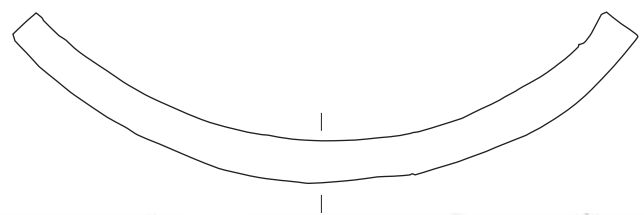
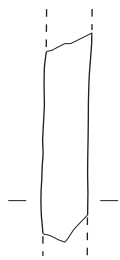
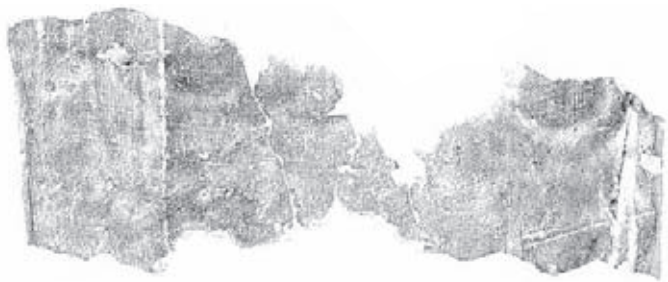
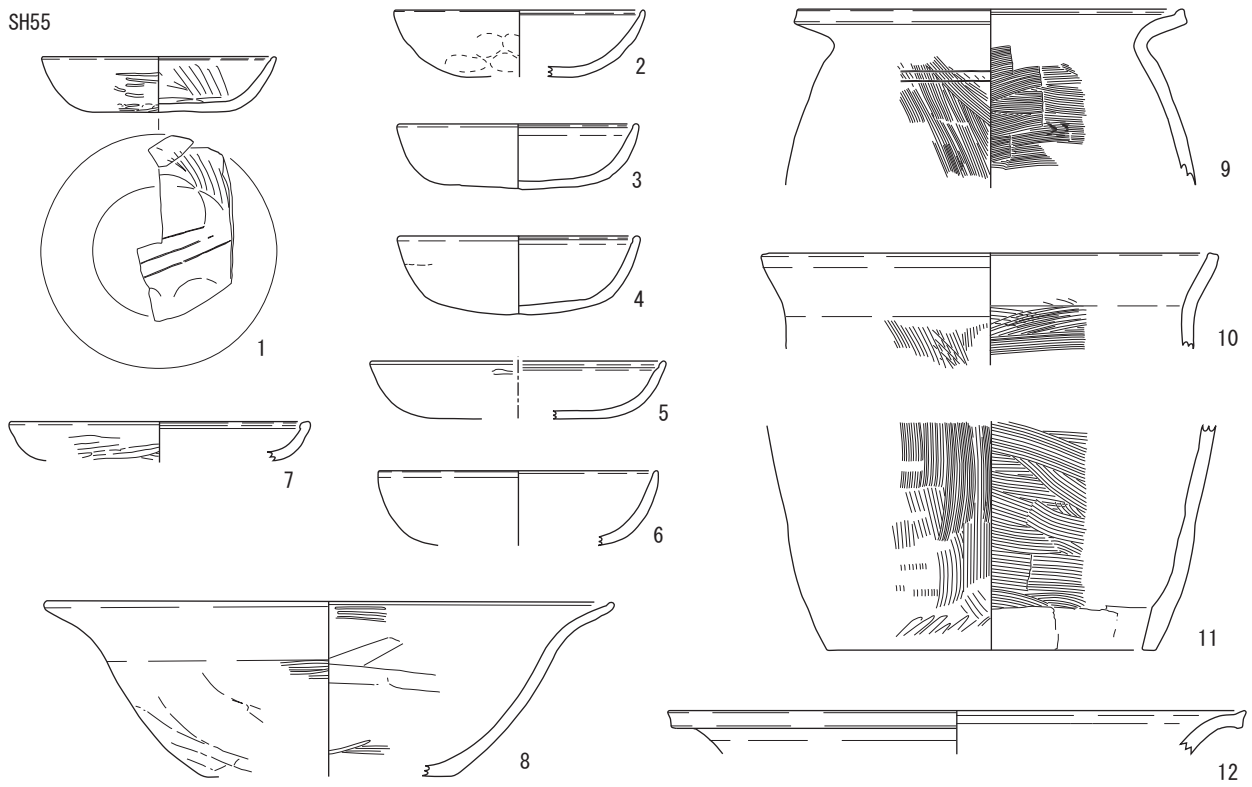
Tab.1 出土遺物観察表(1)

番号	出土遺構	グリッド	種別	器種	口径	器高	底・高台径	備考	胎土の色調	実測番号
1	SH55カマド内	L12	土師器	杯	12.1	2.9		内：放射状暗文・螺旋暗文・焼成前ヘラ記号、外：ヘラガキ	5YR6/8	1301
2	SH55袖西	L12	土師器	杯	12.9			内：ヘラガキ？、外：被熱+煤	5YR6/6	1305
3	SH55No.4	L12	土師器	杯	12.4	3.4		内：環状に煤	10YR6/6	1401
4	SH55No.9	L12	土師器	杯	12.3	4.1		煤？	10YR6/6	1402
5	SH55カマド内	L12	土師器	杯				外：ヘラガキ？	5YR6/8	1302
6	SH55	L12	土師器	杯	14.5			内外：摩滅	5YR6/8	1303
7	SH55	L12	土師器	皿	15.6			外：ヘラガキ	5YR6/8	1304
8	SH55No.1・6	L12	土師器	鍋	29.8	9.2	13.5	内外：ケズリ・ヘラガキあり	5YR6/8	1601
9	SH55No.7	L12	土師器	甕	20.1			内外：刷毛目	10YR6/4	1501
10	SH55No.8	L12	土師器	甕	23.0			内外：刷毛目	10YR6/4	1502
11	SH55No.2	L12	土師器	甕			17.2	No.8と同一個体か	10YR6/4	1602
12	SH55	L12	須恵器	甕	30.2				10YR6/1	1403
13	SH55No.10	L12	瓦	平瓦				長さ11.3m×幅33.1m 外面格子叩き痕	10YR7/4	3001
14	SH55竈左袖	L12	瓦	平瓦				長さ37.9m×幅30.8m、外面縄叩き痕	2.5Y8/4	2801
15	SH55竈右袖	L12	瓦	平瓦				長さ25.1m×幅28.6m、外面縄叩き痕	2.5Y4/1	2901
16	SD01	B45	常滑陶器	鉢					10YR3/1	0101
17	SD01	B46	土師器	鍋				調整不明	10YR8/3	0102
18	SD05	F45	土師器	皿	12.0			口：ヨコナデ、外：ユビオサエ	10YR8/3	0103
19	SD07	K49	土師器	小皿	9.4			口：ヨコナデ	10YR8/2	0104
20	SD7下層	K47	石製品	火輪		12.0	23.5	五輪塔	10YR7/2	1701
21	SD08	K46	常滑陶器	鉢					5YR5/6	0105
22	SD08	K46	土師器	羽釜				煤付着	10YR7/4	0106
23	SD10	C46	瀬戸美濃陶器	天目茶碗			3.2	鉄釉・鉄化粧	10YR8/2	0107
24	SX11	L45	山茶碗	碗			5.9	無高台	10YR8/1	0108
25	SX11	L45	土師器	羽釜				ヨコナデ、煤付着	10YR7/1	0109
26	SK14	M44 N44	土師器	鍋				ヨコナデ、煤付着	10YR7/1	0110
27	SD12下層	N42	瀬戸美濃陶器	四耳壺				灰釉	10YR8/2	0201
28	SD12下層	M42	常滑陶器	壺					10YR4/1	0301
29	SD12下層	M42	常滑陶器	甕					10YR4/1	0302
30	SD12下層	N42	山茶碗	碗	13.1	4.8	4.8	内面磨耗、板状圧痕・無高台	10YR7/1	0204
31	SD12下層	M41	山茶碗	碗			5.0	板状圧痕・無高台	10YR7/1	0202
32	SD12下層	N42	山茶碗	碗			4.5	粗殻痕、東濃系	10YR8/6	0203
33	SD12下層	M41	山茶碗	小皿	8.0	2.0	4.6	内面磨耗	10YR7/1	0205
34	SD12下層	M42	山茶碗	小皿	8.5	1.8	5.2	内面磨耗	10YR7/1	0207
35	SD12下層	M41	山茶碗	小皿	8.5	1.6	5.2	内面磨耗	10YR7/1	0206
36	SD12トレンチ	M41	土師器	小皿	7.0			外：ユビオサエ	10YR7/6	0303
37	SK13	L41	山茶碗	碗	15.7	4.5	7.4	粗殻痕	10YR7/1	0401
38	SK13	L41	山茶碗	碗	14.6	4.9	8.0	内面磨耗、粗殻痕	10YR7/1	0403
39	SK13	L41	山茶碗	碗	15.5	4.9	7.0	内面磨耗、粗殻痕	10YR7/1	0402
40	SK13	L42	山茶碗	碗			6.4	粗殻痕	10YR7/1	0404
41	SK13トレンチ4	L41	山茶碗	小皿	8.0	2.0	5.1		10YR7/1	0503
42	SK13	L42	土師器	小皿	8.2	1.5		外：ユビオサエ	10YR8/4	0405
43	SK13トレンチ4	L41	山茶碗	片口鉢	34.8	13.5	16.5	内面磨耗、高台内砂粒	10YR7/1	0501
44	SK13	L41	土師器	鍋					10YR7/3	0502
45	SK17	M42	山茶碗	碗	14.5	5.9	6.5	内面磨耗、粗殻痕	10YR7/1	0601
46	SK17	M42	山茶碗	碗			5.4	内面漆？付着、板状圧痕・無高台	10YR7/1	0602
47	SK18	M39	山茶碗	小皿	7.8	1.3	4.8	内面磨耗、底外面墨痕	10YR7/1	0603
48	SK18	M39	縄文土器	深鉢					10YR7/4	0604
49	SK20	M36	土師器	鍋	25.0			内：ヨコナデ、外：刷毛目+ケズリ、煤付着	10YR7/1	2201
50	SK21E	L38	土師器	鍋				内：ユビオサエ+ヨコナデ、外：刷毛目	10YR8/3	2001
51	SK21	L38	土師器	羽釜	20.7			内：ヨコナデ+ケズリ、外：刷毛目+ケズリ	10YR8/2	2002
52	SK22	L37	山茶碗	碗				外面墨書、無高台	10YR7/1	0605
53	SK22	L37	土師器	小皿	8.1	1.1		底外：ユビオサエ	10YR7/6	0606
54	SK22	L37	土師器	皿	9.5			外：ユビオサエ	10YR8/3	0607
55	SD23	M35	瀬戸美濃陶器	折縁小皿	8.4	2.5	5.0	灰釉（底外面露胎）、底：回転糸切痕	10YR7/1	0701
56	SD26	M34	山茶碗	碗	15.2	5.4	6.8	粗殻痕	10YR7/1	0208
57	SD26	M34	瀬戸美濃陶器	瓶類				鉄釉、内面に赤黒い付着物	10YR2/1	0702
58	SK28	M38	山茶碗	小皿	7.7	1.8	4.0	底外：墨痕・板状圧痕	10YR7/1	0703
59	SK29	M37	土師器	鍋	22.8			内：ヨコナデ+ユビオサエ 外：刷毛目、煤付着	10YR8/3	2101
60	SK29	M37	土師器	鍋	27.0			内：ヨコナデ、外：刷毛目、煤付着	10YR8/3	2102
61	SK31	L29	山茶碗	碗			5.5	輪トチ風高台・粗殻痕多	10YR7/1	0704
62	SK31	L29	山茶碗	小皿	8.0	1.7	4.8		10YR7/1	0705
63	SK32	M21	山茶碗	碗	14.6	5.1	6.5	内面磨耗、粗殻痕多	10YR7/1	0706
64	SK34	M22	山茶碗	小皿	7.6	2.2	4.9		10YR7/1	0707

Tab.2 出土遺物観察表(2)

番号	出土遺構	グリッド	種別	器種	口径	器高	底・高台径	備考	胎土の色調	実測番号
65	SK34	M22	山茶碗	碗			5.0	内面磨耗、底外面墨書	10YR8/3	0708
66	SK35	L22	山茶碗	碗	13.6	4.8	5.7	内外面煤付着・高台剥離痕	10YR8/3	0801
67	SD36	M22	白磁	碗				玉縁口縁	10YR7/1	0802
68	SD42	M17	山茶碗	小皿	8.2	1.4	5.7		10YR7/1	0805
69	SD39	M19	山茶碗	碗	17.3	5.4	7.8	内面磨耗、靱殻痕多	10YR7/1	0803
70	SD39	M19	瓦器	椀					10YR8/1	0804
71	SK44上層	L18	山茶碗	碗	13.0			高台剥離痕	10YR7/1	0902
72	SK44上層	L18	山茶碗	碗	13.4	5.6		高台剥離痕	10YR7/1	0903
73	SK44上層	L18	山茶碗	碗			6.7	底外：輪トチ状粘土付着	10YR7/1	0901
74	SK44トレンチ	L19	山茶碗	碗			5.3	無高台・板状圧痕	10YR7/1	0904
75	SK44トレンチ	L19	山茶碗	碗			6.0	靱殻痕	10YR7/1	0905
76	SK44上層	L19	山茶碗	小皿	7.8	1.6	4.7	内面磨耗、底外：墨痕	10YR7/1	0906
77	SK44上層	L18	土師器	小皿					10YR7/8	0907
78	SK44トレンチ	L19	常滑陶器	甕				押印文	10YR6/1	0908
79	SK44上層	L19	常滑陶器	甕	45.0				10YR7/1	1002
80	SK44上層	L18	常滑陶器	壺	14.0			押印文	10YR4/1	1001
81	SD46	L15	土師器	鍋	20.0			外：ユビオサエ+ナデ	10YR7/1	1101
82	SK48	M16	山茶碗	碗	17.0	5.7	7.8	内面磨耗、靱殻痕少	10YR8/2	1203
83	SK48	M16	山茶碗	碗	15.1	5.8	6.0	靱殻痕	10YR7/1	1205
84	SK48	M16	土師器	皿	14.7			ロクロ成形・内外面煤付着	10YR8/6	1204
85	SK48	M15	山茶碗	小皿	8.0	1.7	4.4		10YR7/1	1201
86	SK48	M16	山茶碗	小皿	8.5	1.6	5.5	内面やや磨耗	10YR7/1	1202
87	SD66	K7	山茶碗	小皿	8.4	1.4			10YR7/1	1902
88	SK63	H4	土師器	小型鉢	13.4	5.5		外面粘土紐痕	10YR8/4	1901
89	P.1	N38	山茶碗	小皿	8.1	1.5	5.0	内面磨耗、底部墨書	10YR7/1	2708
90	P.2	L17	土師器	鍋	18.1				10YR3/1	2709
91	SK61	F2	山茶碗	碗	13.4	4.9	5.8	無高台	10YR7/1	1801
92	SK61	F2	山茶碗	碗			5.5	無高台	10YR7/1	1802
93	SK61	F2	山茶碗	碗			5.3	無高台・底外面墨書	10YR7/1	1803
94	SK61	F2	山茶碗	小皿	7.8	1.6	4.8		10YR7/1	1804
95	SK61	F2	土師器	皿	11.5			ヨコナデ+ユビオサエ	10YR8/4	1806
96	SK61	F2	土師器	皿	10.2				10YR8/3	1807
97	SK61	F2	土師器	小皿	9.0			ヨコナデ+ユビオサエ	10YR7/3	1808
98	SK61	F2	土師器	小皿	8.9				10YR8/4	1809
99	SK61	F2	青磁	碗				鍋蓮弁文	10YR8/1	1805
100	SK61	F2	木製品	曲物底?				直径17.7×厚さ0.9m、切り込みあり		3101
101	SK61	F2	木製品	曲物底?				厚さ0.8m		3201
102	SK61	F2	木製品	棒				1.7×1.8×長さ41.3～		3301
103	包含層	K5	須恵器	杯蓋	13.4			外：ロクロスリ	10YR6/1	2707
104	包含層	H2	製塩土器					内：刷毛目、外：ユビオサエ	5YR6/8	2606
105	包含層	J47	山茶碗	小椀	8.5	2.2	3.4	内面磨耗、靱殻痕	10YR7/1	2406
106	包含層	M15	山茶碗	小皿	7.9	1.4	5.0		10YR7/1	2407
107	包含層	M12	山茶碗	碗	16.8	5.5	6.9	内面磨耗、靱殻痕少	10YR8/3	2401
108	包含層	M17	山茶碗	碗	15.2	5.7	6.1	砂粒痕	10YR7/1	2502
109	包含層	M15	山茶碗	碗			7.5	内面磨耗、靱殻痕少・砂粒痕少	10YR7/1	2501
110	包含層	Z46	山茶碗	碗	15.0	5.4	6.3	靱殻痕多	10YR7/1	2402
111	包含層	M21	山茶碗	碗			8.5	内面磨耗、靱殻痕	10YR7/1	2503
112	包含層		山茶碗	碗			5.2	靱殻痕多・板状圧痕	10YR7/1	2504
113	包含層	M22	山茶碗	碗	12.5	5.0	5.0	輪トチ状の粘土紐・靱殻痕多	10YR7/1	2403
114	包含層	M35	山茶碗	碗			5.2	靱殻痕・板状圧痕・高台内墨書	10YR7/1	2405
115	包含層	L17	山茶碗	碗			5.0	腰に墨書「+」、無高台・板状圧痕	10YR7/1	2404
116	包含層	M21	山茶碗	碗			6.2	高台剥離痕・底部墨書	10YR7/1	2506
117	包含層	F46	山茶碗	鉢				瀬戸産	10YR6/1	2703
118	包含層	L35	瀬戸美濃陶器	折縁深皿				灰釉	10YR7/1	2702
119	包含層	M40	常滑陶器	甕					10YR6/1	2701
120	包含層	L42	白磁	碗					10YR8/1	2705
121	包含層	M18	青磁	碗					10YR6/1	2704
122	包含層	M19	土師器	椀			7.3	ロクロ成形、底：回転糸切痕	10YR7/8	2603
123	包含層	M18	土師器	小皿			8.0	ヨコナデ+ユビオサエ	10YR8/4	2604
124	包含層	C46	土師器	羽釜	20.4			内：ヨコナデ、外：刷毛目	10YR8/4	2601
125	包含層	M36	土師器	羽釜	20.0			内：ヨコナデ、外：刷毛目、煤・コゲ付着	10YR8/3	2602
126	包含層	N18	土師器	鍋				ヨコナデ、煤付着	10YR8/2	2605
127	溝	試掘G9	土師器	鍋	26.0			内：不明、外：刷毛目、煤付着	10YR7/3	2301
128	包含層	M21	山茶碗	碗			5.3	靱殻痕・板状圧痕	10YR7/1	2505

SH55



13

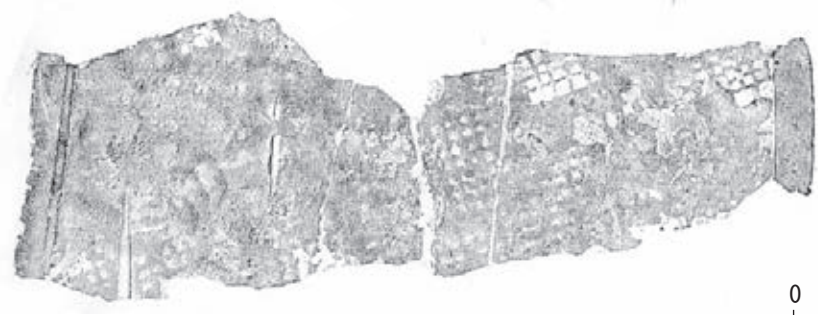
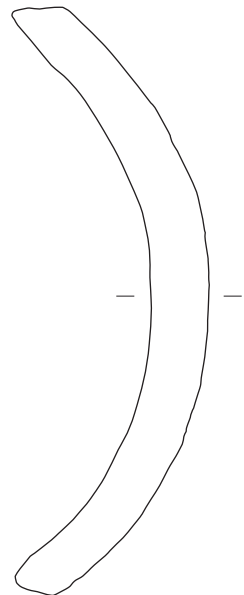
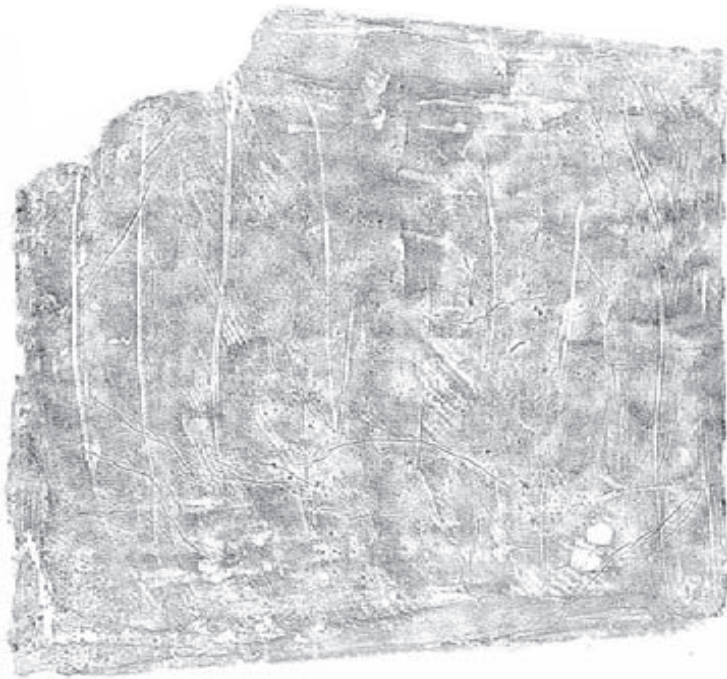
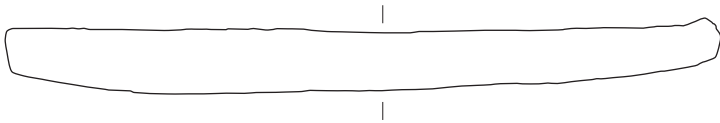


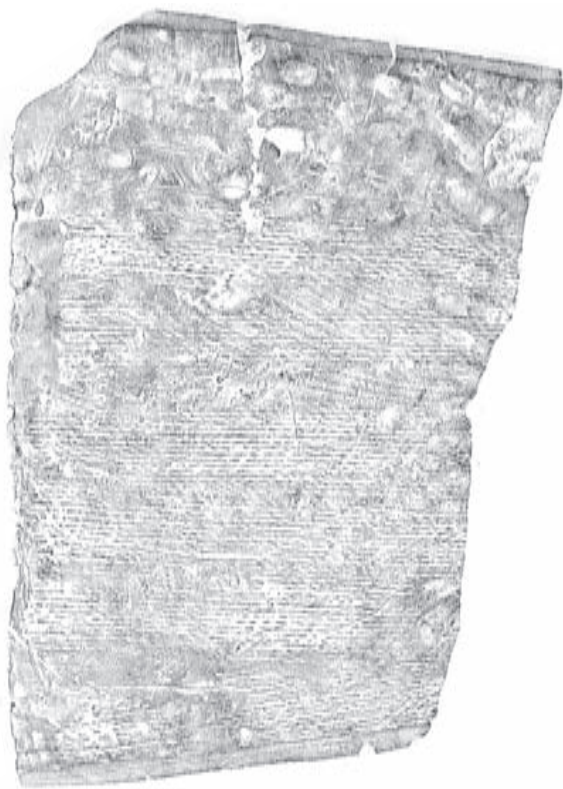
Fig.8 出土遺物実測図 1 (1/4)



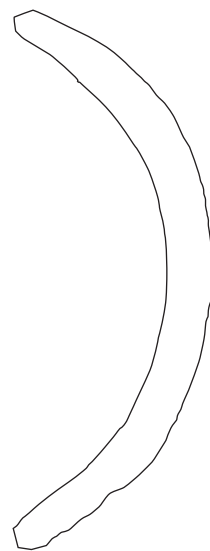
14

0 20cm

Fig.9 出土遺物実測図2 (1/4)



15



0 20cm

Fig.10 出土遺物実測図 3 (1/4)

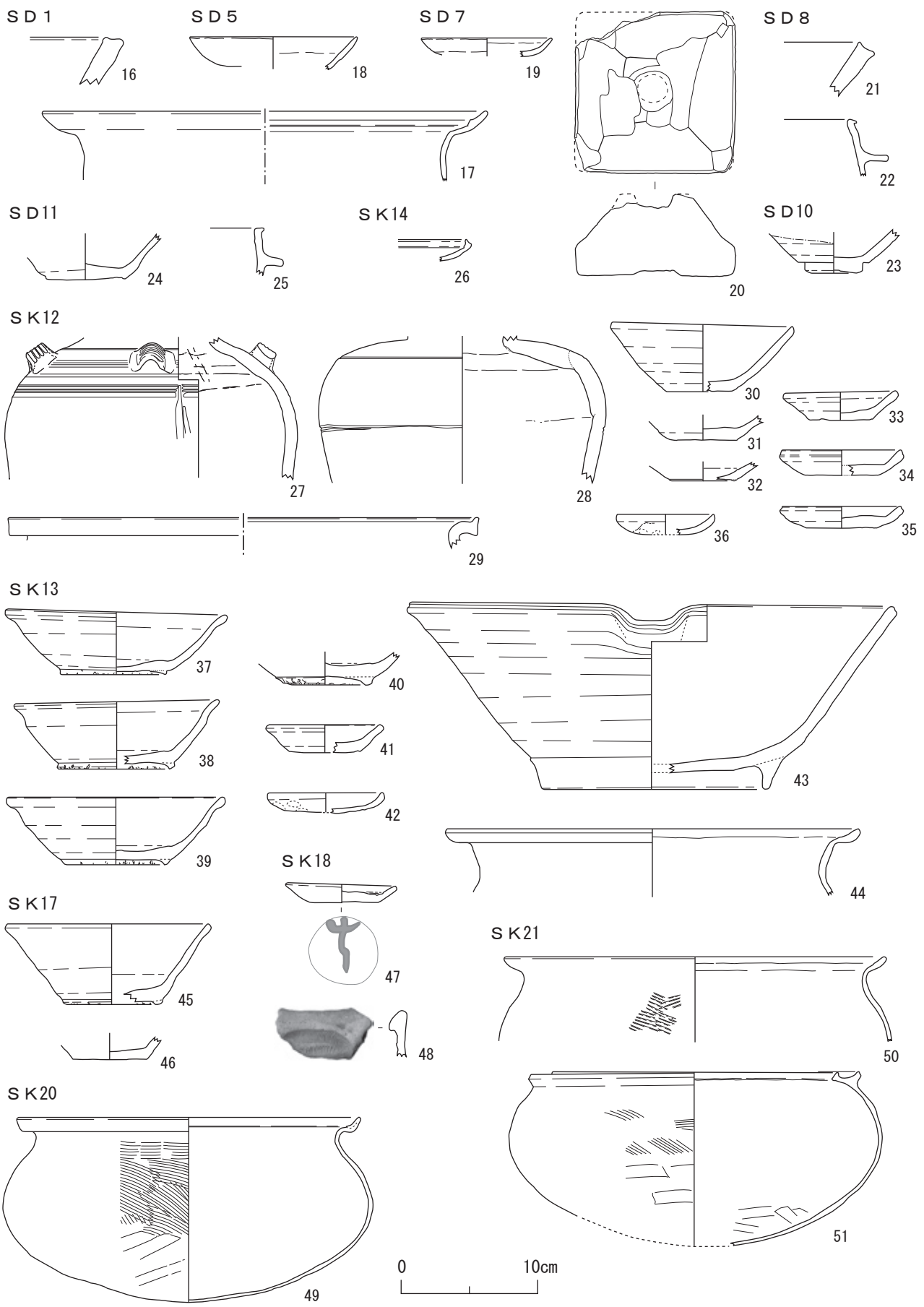


Fig.11 出土遺物実測図4 (1/4)

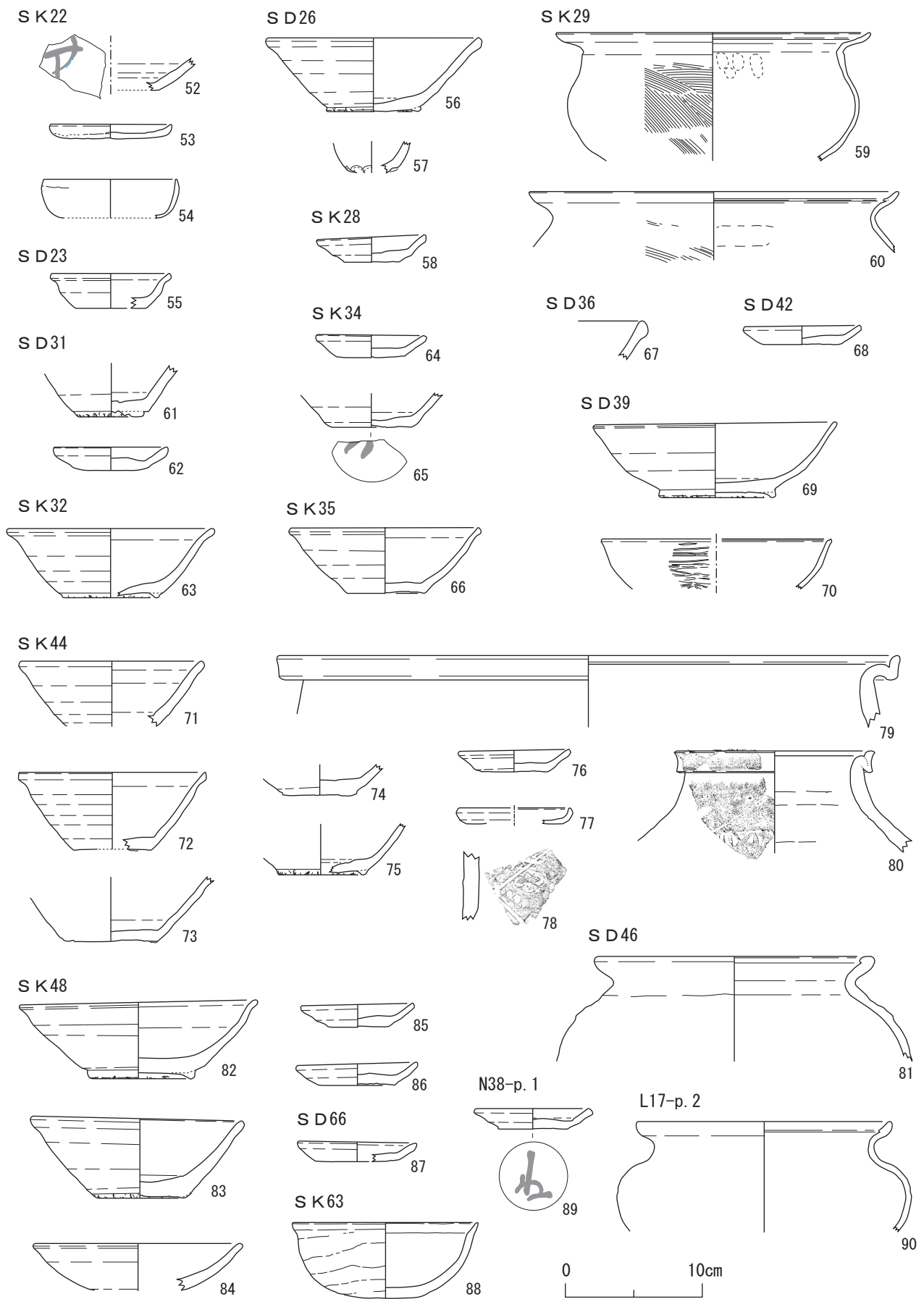
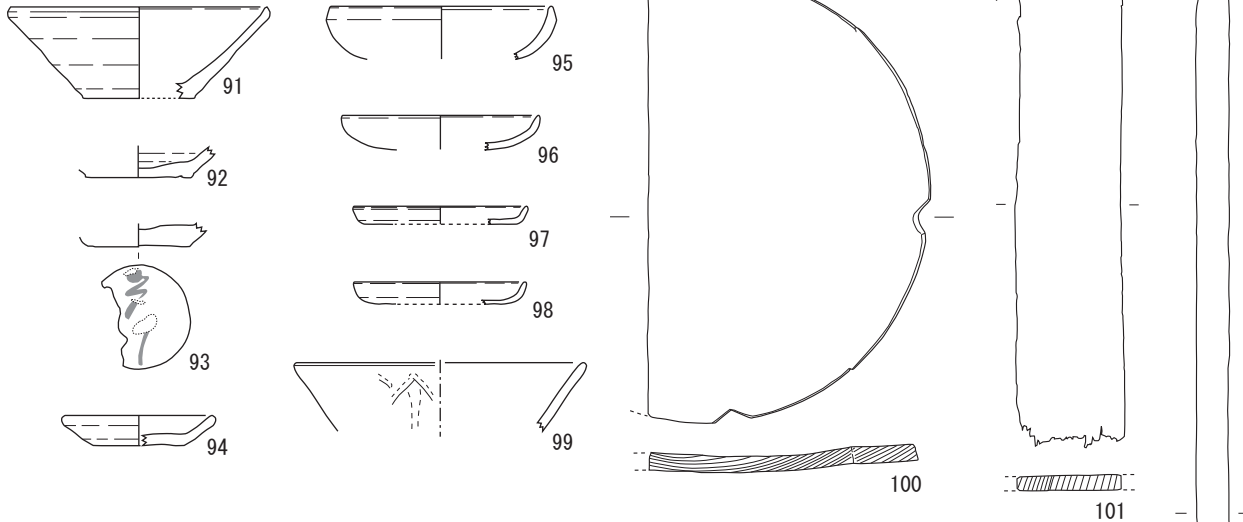
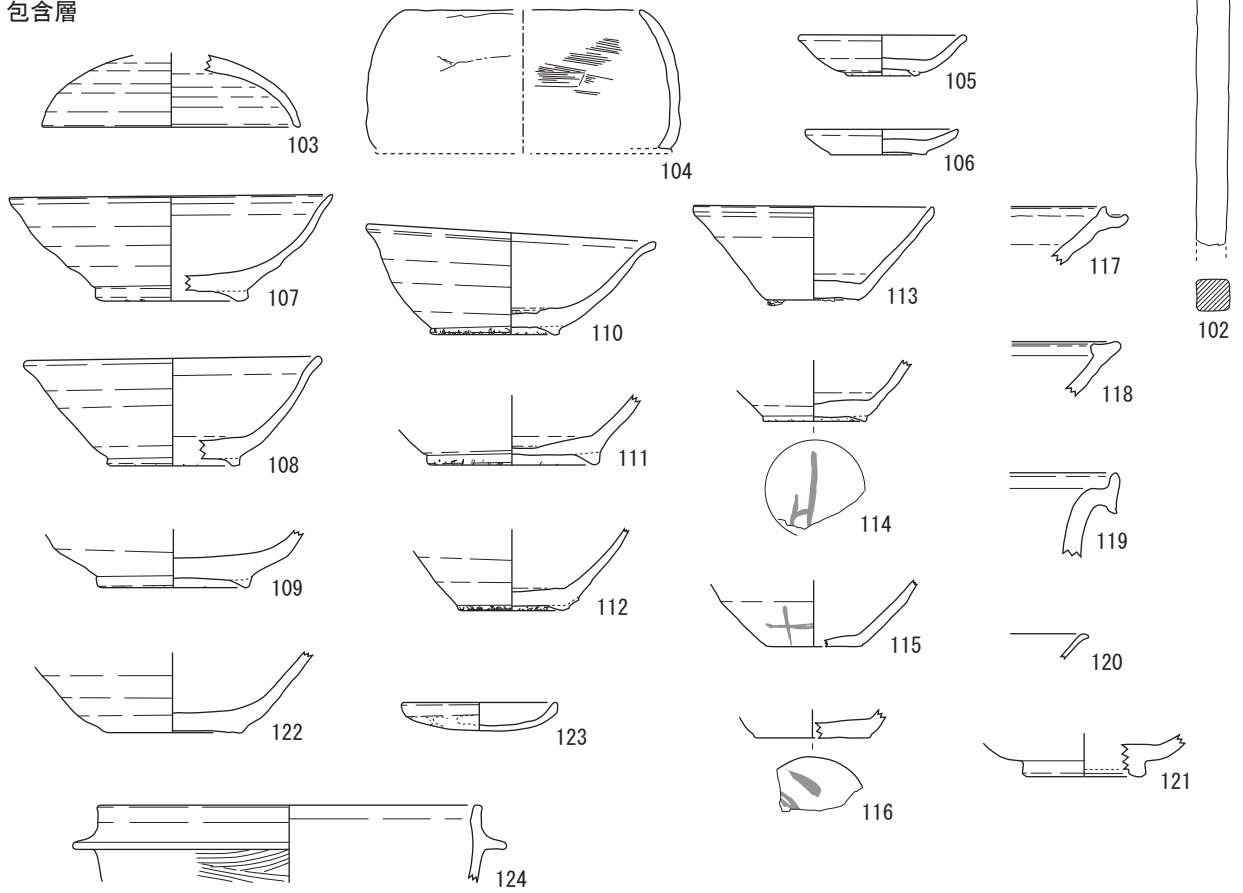


Fig.12 出土遺物実測図5 (1/4)

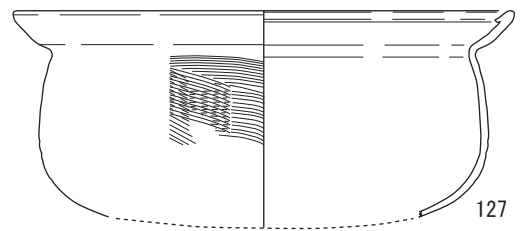
SE61



包含層



試掘G9 溝



0 10cm

Fig.13 出土遺物実測図6 (1/4)

Tab.3 検出遺構一覧表(1)

遺構名	遺構の性格	グリット	時期	遺構の概要	遺構のきりあい	主な遺物
SD 01	溝	B45・46	中世	断面逆台形の溝。幅約1.2m、底面幅0.4m、深さ0.4m。N75°W。	単独	土師器(皿・鍋)・山茶碗(碗)・常滑陶器(鉢・甕)、近世磁器1点は混入か。
SK 02	土坑	C45・46	中世	方形の土坑。一辺1.4m、深さ0.2m。中央に径0.4m、深さ0.4mの小穴あり。	単独	土師器鍋など少量
SD 03	溝	E・F46	中世	段状の溝。幅1.2m以上、長さ6m以上、深さ0.3m。SD05より新。	SD 05 → SD03	須恵器(甕)・土師器(皿・鍋・羽釜)・常滑陶器(甕)
SD 04	溝	E45・F45	近世	弧状の溝。幅1m、長さ7m以上、深さ0.2m。SD05・SD06より新。	SD 05 → SD04	近世陶磁器など
SD 05	溝	E～G45・46	中世	直線の溝。幅0.9m、長さ4m以上、深さ0.2m。N20°E。SD03・04より古。	SD 05 → SD03・04	須恵器・土師器(鍋・皿)・山茶碗(碗)
SK 06	土坑	G45	不明	1m×0.5m以上、深さ0.15m。SD04より古。	SD06 → SD04	鞆羽口
SD 07	溝	J46～K50	中世	幅1.6m、長さ16.5m以上、深さ1.0m。SD08より新。谷への排水溝か。	SD08 → SD07	須恵器(甕)・土師器(甕・鍋・羽釜・皿)・灰釉陶器(碗・皿)・山茶碗(碗・皿)・常滑陶器(鉢・甕)・瀬戸美濃陶器(小皿)・瓦・不明土製品・砥石・五輪塔(火輪)
SD 08	溝	K46～L48	中世	幅2.5m、長さ16.0m以上、深さ0.6m。SD07より古。谷への排水溝か。	SD08 → SD07	須恵器(甕)・土師器(甕・鍋・羽釜・皿)・灰釉陶器・山茶碗(碗・小皿)・常滑陶器(鉢・甕)・瀬戸美濃陶器(皿)
SD 09	窪み	L・M47	不明	幅0.7m、長さ2.7m、深さ0.3m。自然流路の残欠か。	単独	
SD 10	溝・段?	C・D46	中世後期	段状の溝。幅0.4m以上、長さ3.5m以上、深さ0.3m。	単独	土師器(鍋・羽釜)・山茶碗(碗)・常滑陶器(甕)・瀬戸美濃陶器(天目茶碗)
SD 11	窪み	K～M45・L46	中世	不整形。自然流路の残欠か。		縄文土器・土師器(皿・鍋・羽釜)・山茶碗(碗)・常滑陶器(甕)・瀬戸美濃陶器(縁釉小皿・鉄釉袋物)
SK 12	土坑	M・N41・42	中世後期	略長方形の土坑。4.3m×約2.8m、深さ0.7m。SK13・SK17より新。	SK 13 → SK 17 → SK 12	須恵器(甕)・土師器(皿・鍋)・山茶碗(小皿・碗・鉢・甕)・常滑陶器(甕・壺)・瀬戸美濃陶器(香炉?・鉢・四耳壺・袋物)・瓦
SK 13	土坑	L41・42	中世前期	傾斜の緩い凹み。4.8m×3.4m以上、深さ約0.2m。SD17・SK12より古。	SK 13 → SK 17 → SK 12	灰釉陶器(碗)・土師器(鍋)・山茶碗(小皿・碗)・常滑陶器(甕)・瓦
SK 14	土坑	N44	中世	不整形。3.7m以上×2.0m以上、深さ0.4m。複数土坑の集合か。	単独	須恵器(杯)・土師器(皿・鍋・羽釜)・山茶碗(碗)・常滑陶器(甕・壺?)・青磁(碗)
SK 15	土坑	M42	中世	楕円形の土坑。2.1m×1.7m、深さ0.2m。	単独	土師器(皿・鍋)・山茶碗(碗)・スサ入り焼土
SK 16	窪み	L43	中世	不整形。3.0以上×2.7m、深さ0.4m。自然流路の残欠か。	単独	須恵器(甕・壺)・土師器(杯・甕・鍋)・山茶碗(碗・袋物)・製塩土器・丸瓦
SK 17	土坑	M42	中世	方形の土坑。2.5m×1.6m以上、深さ0.5m。SK13より新、SK12より古。	SK 13 → SK 17 → SK 12	土師器(皿・鍋)・灰釉陶器(壺)・山茶碗(碗・鉢)・常滑陶器(甕)・白磁
SK 18	土坑	L39	中世	楕円形の土坑。1.2m×1.0m、深さ0.5mで中央に径0.4m、深さ0.2mの小穴。	単独	縄文土器・土師器(小皿・鍋・羽釜)・山茶碗(小皿)
SK 19	土坑	N39・40	中世	3.3×2.2以上、深さ0.6m。	単独	須恵器(杯・甕)・土師器(皿・鍋・羽釜)・山茶碗(碗・鉢)・常滑陶器(鉢・甕)・瀬戸美濃陶器(碗・壺)
SK 20	土坑	M36	中世	略円形の土坑。径0.6m、深さ0.3m。	単独	土師器(鍋)
SK 21	土坑	L・M38	中世後期	一部張り出しのある方形土坑。長さ2.7m×幅1.7mで最大幅は2.2m、深さ0.25m。SK28より新。	SK 28 → SK 21	須恵器(甕)・土師器(皿・鍋・羽釜)・山茶碗(小皿・碗・壺)・常滑陶器(甕)・瓦
SK 22	土坑	L・M37	中世	1.9m×1.5m、深さ0.3m。	SK 29 → SK 22	土師器(皿・鍋)・山茶碗(小皿・碗・鉢)・黒色土器・常滑陶器(甕)・瀬戸美濃陶器(縁釉小皿)・灰・焼土塊
SD 23	溝	M35・36	中世	段丘端へのびる溝。幅1.7～2.5m、長さ5.3m以上、深さ約0.2m。	単独	土師器(鍋)・山茶碗(碗)・常滑陶器(甕)・瀬戸美濃陶器(灰釉小皿)
SK 24	土坑	N38	中世	非常に浅い土坑。2.0m×1.3m以上、深さ0.2m。SK28より新。	SK 28 → SK 24	土師器(皿・鍋)・山茶碗(小皿・碗・鉢)・鞆羽口
SK 25	土坑	N37・38	中世	方形の土坑。1.6m×0.9m以上、深さ0.1m。	単独	須恵器(杯身)・山茶碗(小皿・碗)
SD 26	溝	L～N34	中世後期	し字の溝。幅1.1m×長さ4.8m×深さ0.4mの溝と長さ2.8m×深さ0.1mの溝が直交する。別遺構の可能性あり。	単独	須恵器(甕)・土師器(小皿)・山茶碗(碗・鉢)・常滑陶器(甕)・瀬戸美濃陶器(小皿・瓶類)
SD 27	溝	L32	不明	幅0.35m、長さ1.0m以上、深さ0.2m。	単独	瓦片?
SK 28	土坑	M38	中世前期	略方形の土坑。4.3m×約4.0m、深さ0.15m。SK21・SK24より古。	SK 30 → SK 28 → SK 21・24	土師器(皿・鍋)・山茶碗(小皿・碗)・常滑陶器
SK 29	土坑	M37	中世後期	不整形の土坑。1.1m×0.8m、深さ0.2m。SK30より新。	SK 30 → SK 29 → SK 22	土師器(皿・鍋)・常滑陶器(甕)
SK 30	土坑	M37	中世?	不整形の細長い土坑。2.6m×0.7m、深さ0.3m。SK29より古。	SK 30 → SK 28・29	土師器(鍋)

Tab.4 検出遺構一覧表(2)

遺構名	遺構の性格	グリット	時期	遺構の概要	遺構のきりあい	主な遺物
SD 31	溝?	L・M29	中世	幅 1.2 m、長さ 3.8 m 以上、深さ 0.15 m。	単独	土師器 (杯・甕・皿)・山茶碗 (小皿・碗・鉢)
SK 32	土坑?	M・N21	中世前期	不整形。深さ 0.1 ~ 0.2 m。複数土坑の集合か。	SK 37 → SD 32 → SD 33	須恵器 (甕)・土師器 (甕・皿・鍋)・山茶碗 (碗)
SK 33	土坑	L21	不明	方形の土坑。3.5 m × 1.6 m、深さ 0.4 m。	SD 32・SK 35 → SD 33	土師器片
SK 34	土坑	M・N22	中世	不整形の土坑として検出したが、複数土坑の集合。	SK 34 → SD36	灰釉陶器 (碗?)・土師器 (皿・鍋)・瓦器 (碗)・山茶碗 (小皿・碗・鉢)・常滑陶器 (壺)
SK 35	土坑	L・M23	中世	略長方形の土坑。2.3 m 以上 × 1.4 m、深さ 0.1 m。	SD36・SK37 → SK35 → SD33	須恵器 (蓋)・山茶碗 (碗)
SD 36	溝	M・N22	中世	幅 0.4 m、長さ 3.5 m 以上、深さ 0.15 m。	SK 34 → SD36 → SK35	山茶碗 (小皿・碗)・白磁 (碗)
SK 37	土坑	M22	不明	略方形の土坑。1.3 m × 0.9 m、深さ 0.1 m。	SK37 → SD32・SK35	土師器 (鍋)
SD 38	溝	L ~ N20	中世	幅 2.8 m、長さ 5.0 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m。中央は非常に浅い V 字状に窪む。	単独	須恵器 (甕)・土師器 (小皿・鍋)・山茶碗 (小皿・碗・鉢)・常滑陶器 (甕)・土塊
SD 39	溝	M・N19	中世	幅 0.3 m、長さ 3.0 m 以上、深さ 0.1 m。SD40 より新、SK44 より古。	SD40 → SD39 → SK44	土師器 (杯・甕)・山茶碗 (碗)・瓦器
SD 40	溝	M19	不明	幅 0.5 ~ 1.5 m、深さ 0.1 m。SD39・SK41 より古。	SD40 → SD39	常滑陶器 (火鉢?)
SK 41	土坑	M・N18	中世前期	長方形の土坑。3.9 × 1.8 m 以上。床面は二段落ちで、深さは 0.2 m と 0.4 m。SD40 より新。	SD40 → SK41	土師器 (杯・甕・鍋)・山茶碗 (碗)・常滑陶器 (甕)・白磁 (碗)
SD 42	溝	M16・17	中世	幅 0.7 m、長さ 5.2 m、深さ 0.1 m。南端は土坑状になる。上層に攪乱が重なっていた。	SD42 → SK41	土師器 (皿)・山茶碗 (小皿・碗)・常滑陶器?
SK 43		M・N18		SK41 と同じ	SK41 と同一遺構か	須恵器 (甕)・土師器 (杯・甕)・山茶碗 (碗)
SK 44	土坑	L・M18・19	中世	長方形の土坑。4.5 m × 2.3 m 以上。床面は二段落ちで、深さは 0.1 m と 0.4 m。SD39 より新。	SD39 → SK44	灰釉陶器?・土師器 (杯・甕・皿・鍋)・山茶碗 (小皿・碗・鉢)・常滑陶器 (甕・鉢)・土塊・砥石
SD 45	溝	M・N16	平安以降	幅 0.35 m、長さ 3.5 m 以上、深さ 0.05 m。	SD45 と平行する溝	灰釉陶器 (皿)
SD 46	溝	M・N15	中世前期	幅 0.35 m、長さ 6.2 m 以上、深さ 0.05 ~ 0.1 m。	SD46 と平行する溝	土師器 (皿・鍋)・山茶碗 (碗)
SK 47	土坑	L16・17	中世	不整形の土坑。4.0 m × 3.0 m 以上、深さ 0.2 m。	SK49 → SK47	土師器・山茶碗 (碗・壺)
SK 48	土坑?	M16	中世前期	SD45・SD46 の間で確認されたが関係は不明。	SK50 → SK48	土師器 (杯・鍋)・山茶碗 (小皿・碗)
SK 49	土坑	M16・17	不明	不整形の土坑。SK47 と同一遺構か。	SK49 → SK47	土師器 (甕)
SK 50	土坑	L・M16	中世以降	不整形の土坑。SK47 と同一遺構か。	SK50 → SK48	山茶碗 (碗)
SK 51	土坑	N13・14	中世以降	不整形の土坑。最大長 3.3 m 以上、深さ 0.6 m。		灰釉陶器 (碗・瓶)・土師器 (甕・鍋)・山茶碗 (小皿)
SD 52	溝?	L13	中世以降	不整形の遺構。	SD52 → SD53	須恵器 (杯・瓶)・灰釉陶器 (碗皿)・段皿)・土師器・山茶碗 (小皿・碗)・白磁 (碗)
SD 53	溝	L ~ N12・13	不明	断面逆台形の溝。幅 0.7 m、長さ 7.2 m 以上、深さ 0.1 m。SK54・SH55 より新。	SD60 → SD52 → SD53	須恵器 (甕)・土師器・灰釉陶器 (碗皿・瓶)・山茶碗 (碗)・常滑陶器 (甕)
SK 54	土坑?	L12	平安	楕円形の土坑。1.5 m 以上 × 1.2 m、深さ 0.2 m。	SD60 → SH55 (→ SK54)	土師器 (杯)・灰釉陶器 (小瓶)・山茶碗
SH 55	竪穴住居	L・M11・12	奈良・平安	平面長方形の竪穴住居。4.0 m 以上 × 短辺 3.0 m、深さ 0.2 m。	SD60 → SH55 (→ SK54)	土師器 (杯・皿・甕・鍋)・須恵器 (甕)・平瓦・支脚石
SD 56	攪乱溝	I6 ~ L7	近世以降	幅 2.0 m、長さ 11.0 m 以上、深さ 0.6 m 以下。		須恵器 (甕)・灰釉陶器 (碗皿)・山茶碗 (碗・鉢・壺?)・常滑陶器 (甕)・瀬戸美濃陶器 (鉢)・青磁 (碗)・瓦質土器・丸瓦 (玉縁式)・平瓦・いぶし瓦
SD 57	攪乱溝	H5 ~ L6	近世以降	幅 3.7 m、長さ 12.5 m 以上、深さ 0.2 ~ 0.4 m。		製塩土器・須恵器 (甕)・山茶碗 (碗)・常滑陶器 (甕)・瀬戸美濃陶器・瓦
SD 58	欠番				SD 7 の下層	
SD 59	溝	L・M9	中世以降	幅 0.4 ~ 0.9 m、長さ 3.4 m、深さ 0.1 m。		土師器・山茶碗 (碗)
SD 60	溝	L・M12	平安	幅 1.7 m、長さ 5.7 m 以上、深さ 0.1 m で部分的に窪む。SH55 より古。	SD60 → SH55 (→ SK54)	土師器・灰釉陶器 (小碗)

Tab.5 検出遺構一覧表(3)

遺構	遺構の性格	グリッド	時代	遺構の概要	遺構のきりあい	主な遺物
SE 61	井戸	F2・3	中世	略円形の井戸。直径3.5m、深さ1.9m。		須恵器(瓶・甕)・土師器・灰釉陶器(碗・平瓶・壺)・山茶碗(碗・鉢)・常滑陶器(鉢・甕)・青磁(碗)・木製品
SD 62	溝	H～K4	中世	SE61の東からのびる溝。屈曲部分に方形土坑がある。幅0.7m、直線的な部分の長さ11.7m、深さ0.5m。		須恵器(杯・瓶)・ロクロ土師器・山茶碗(碗)・常滑陶器(甕)
SK 63	土坑	H4	古墳	隅丸長方形の土坑。1.2×2.5m、深さ0.2m。SD62に平行する溝より古。		土師器(小型鉢)
SK 64	土坑	L18	中世	最大幅1.5m以上、深さ0.1m。		土師器(鍋・皿)・山茶碗(碗)
SK 65	攪乱土坑	M8・9	中世以降			土師器・平瓦
SD 66	溝	J～L7	中世以降	ゆるい弧状の溝。幅0.7m、長さ6.3m以上、深さ0.2m。		土師器・須恵器(甕)・山茶碗(小皿)
SK 67	土坑	L15	不明	幅0.6m以上、長さ2.8m、深さ0.3m。		土師器



Fig.14 宮上道遺跡遠景(西から)



Fig.15 宮上道遺跡全景(上が南)

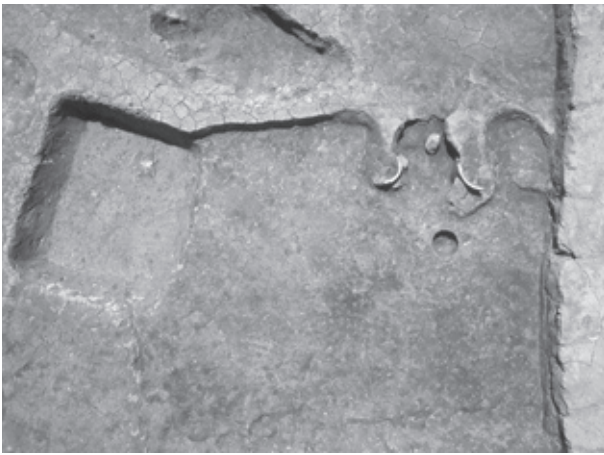


Fig.16 S H 55



Fig.17 S H 55(北から)



Fig.18 S H 55 カマド遺物出土状況



Fig.19 S H 55 カマド



Fig.20 S E 61 掘削作業風景



Fig.21 S E 61

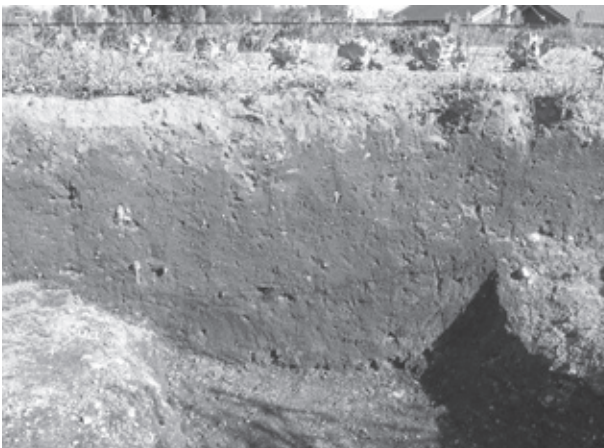


Fig.22 S D 01 断面



Fig.23 S D 7・8 掘削作業風景



Fig.24 S D 7・8 断面



Fig.25 S K 12・13 トレンチ



Fig.26 S K 12 古瀬戸出土

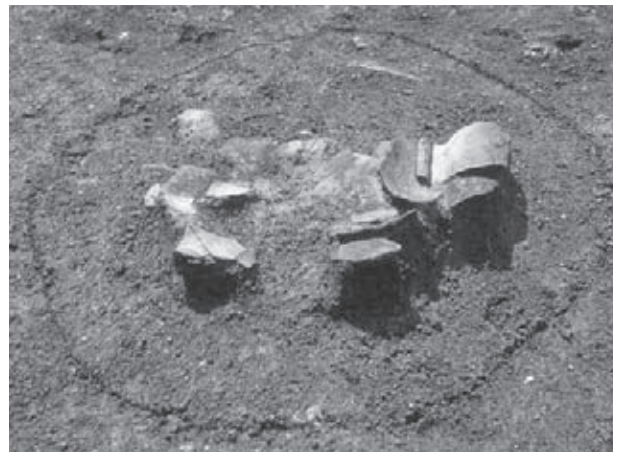


Fig.27 S K 20 土師器鍋出土

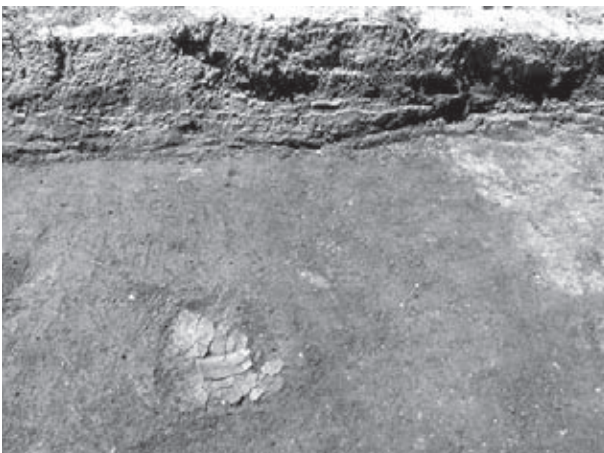


Fig.28 S K 13 土師器鍋出土



Fig.29 S K 48 山茶碗出土



Fig.30 S K 29 土師器鍋出土



Fig.31 現地説明会



Fig.32 調査区 1 ~ 10



Fig.33 調査区 11 ~ 20

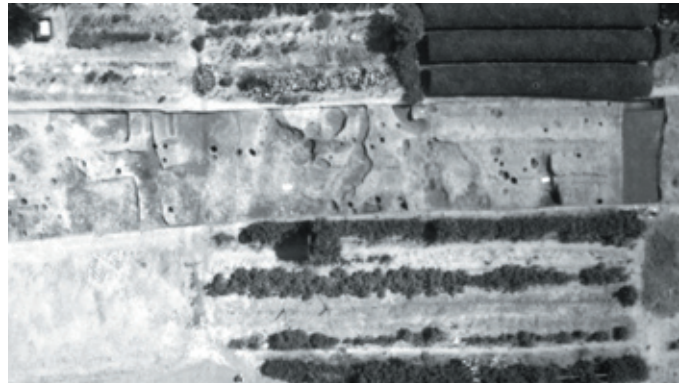


Fig.34 調査区 19 ~ 28



Fig.35 調査区 28 ~ 38

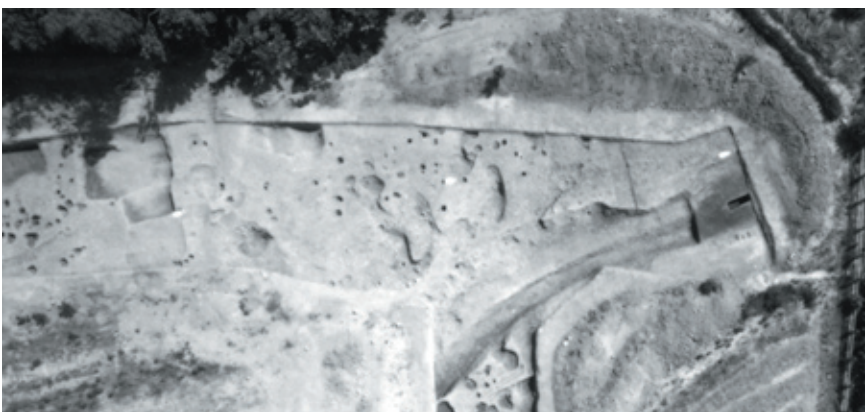


Fig.36 調査区 39 ~ 52



Fig.37 調査区 K ~ Z

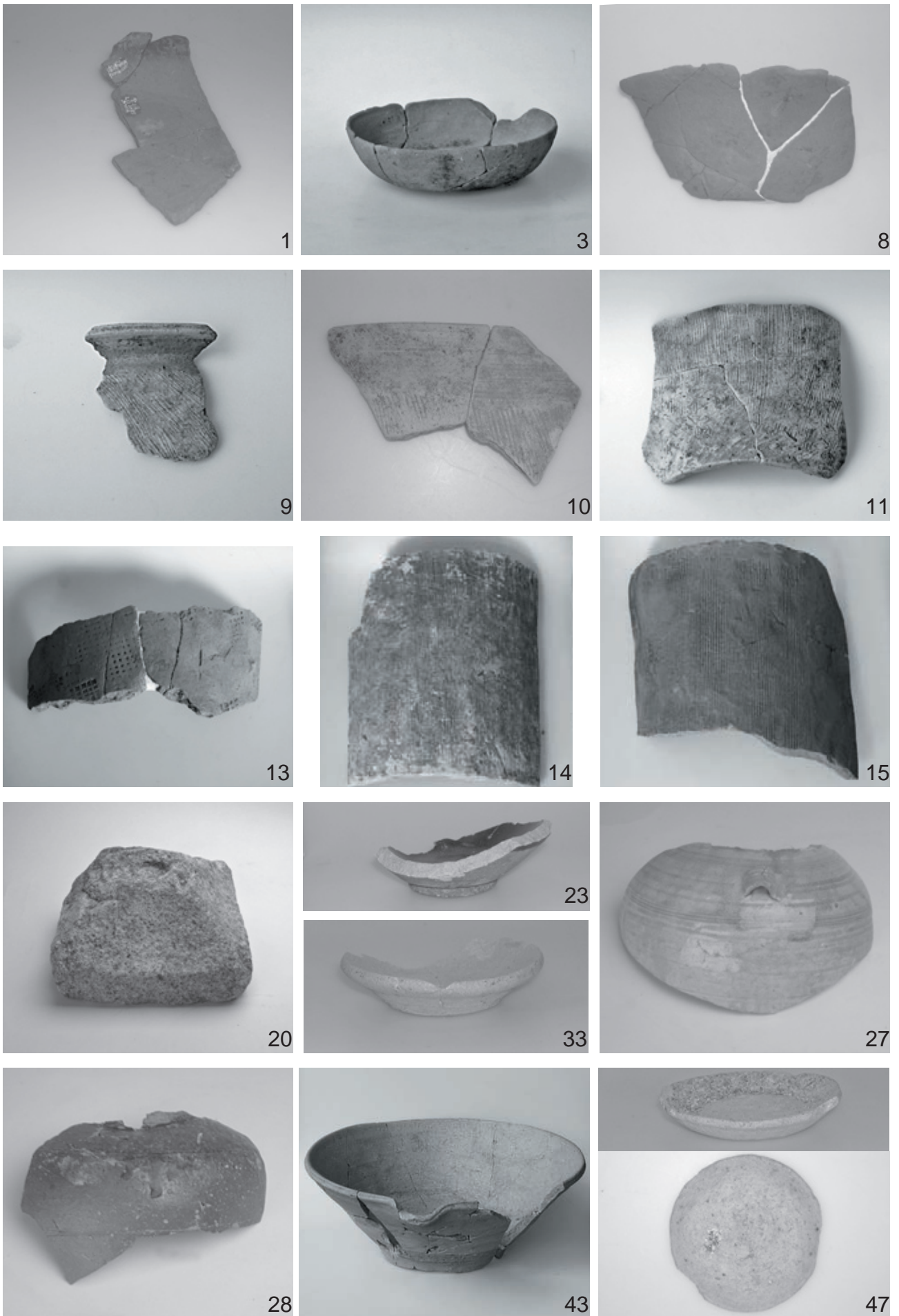


Fig.38 出土遺物(1)

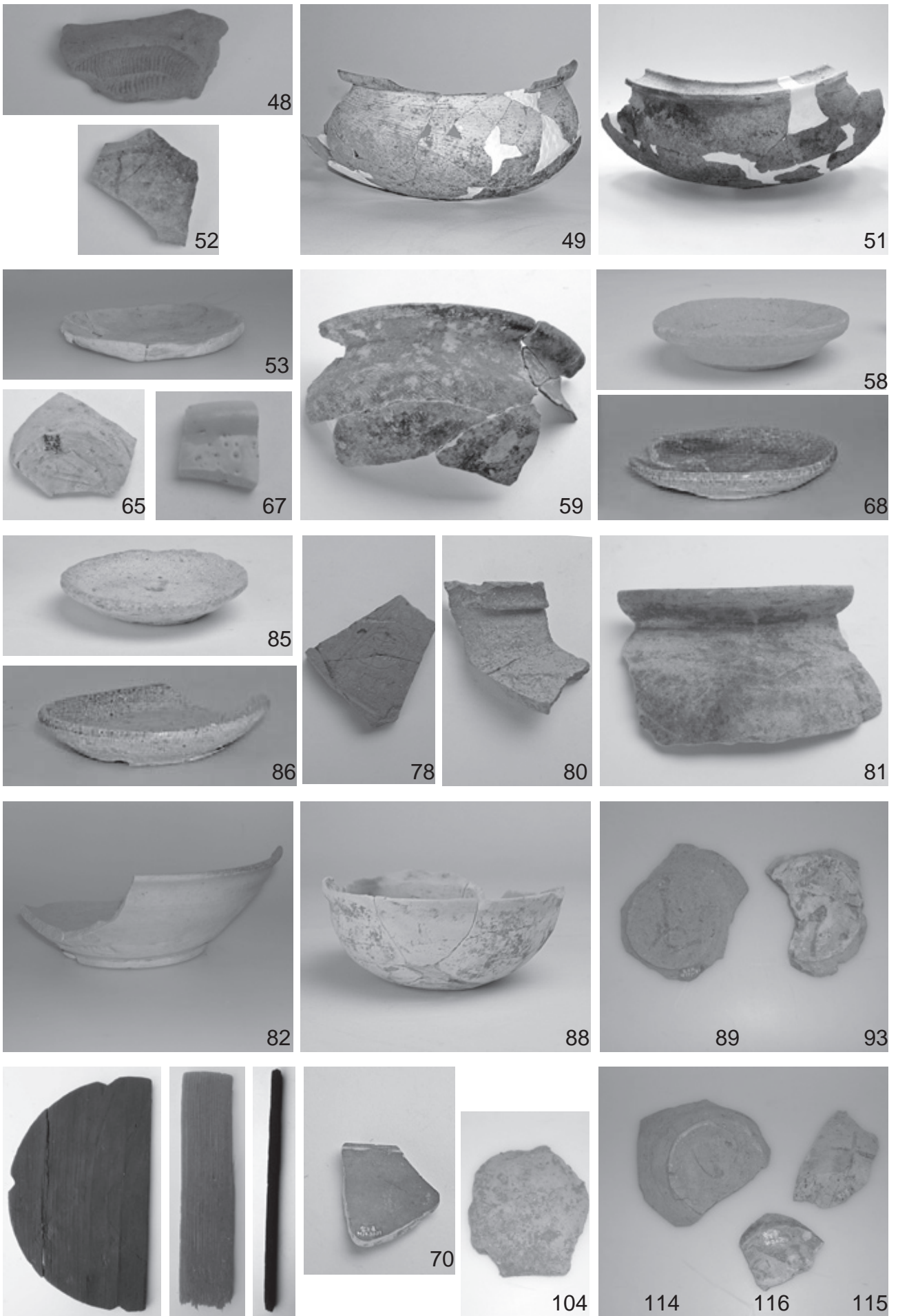


Fig.39 出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	みやうえどういせき							
書名	宮上道遺跡							
編著者名	水橋公恵 藤原秀樹							
編集機関	鈴鹿市考古博物館							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな1	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みやうえどう 宮上道	鈴鹿市小田 町字宮上道	24207	703	34° 52 22	136° 29 42	20040405 ~ 20040622	1,100 m ²	市道新設
所収遺跡名	種別	主な時代	おもな遺構	主な遺物		特記事項		
宮上道	集落	奈良・平安 鎌倉・室町	竪穴住居・土坑・溝・井 戸	土師器・平瓦・山茶碗・ 常滑焼・古瀬戸・青磁・ 白磁・古銭・五輪塔				

宮上道遺跡

2006年3月31日

編集
発行

鈴鹿市考古博物館

〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224

TEL059(374)1994・FAX059(374)0986

E-mail:kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

印刷 早川印刷株式会社

